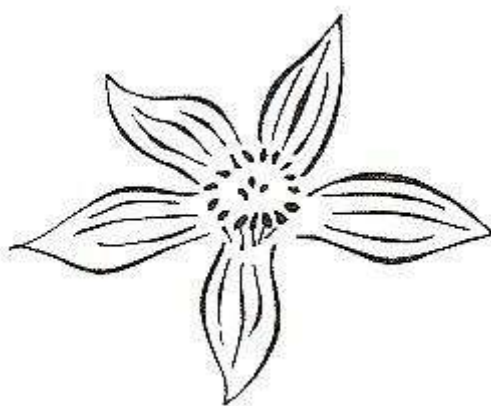


「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」

令和 6 年度研究開発実施報告書



愛媛県立三崎高等学校

巻頭言

愛媛県立三崎高等学校

校長 中井 賢哉

現在、高等学校は義務教育機関ではありませんが、中学校を卒業したほぼ全ての生徒が進学し、そのうち7割以上が普通科で学んでいます。そのため、普通科には多様な入学動機や進路希望を持つ生徒が在籍しており、本校も例外ではありません。従来の一律的な進学指導だけでは、生徒一人ひとりの資質・能力に応じた教育の提供が難しくなっており、学校を取り巻く環境の変化に対応した柔軟な普通科教育の実践が、質の確保において不可欠であると考えます。

また、令和5年3月に愛媛県県立学校振興計画（前期計画）が公表され、本校は魅力化推進校として存続が決定しました。これにより、本校は新たなフェーズへと移行し、これまでの地域活性化を目的とした地域連携の継続だけでなく、その成果を再評価・再構築し、教育内容のさらなる充実を図ることが求められています。

こうした背景のもと、本校は令和4年度より3年間、文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」に採択されました。この事業では、中教審答申において提言された「普通教育を主とする学科」の弾力化を実現するため、「地域社会に関する学科」の設置に向けた実践研究を進めてまいりました。その成果をもとに、「地域の人々と共感しながら、共に社会の創り手となるリーダーを育成する」ことを目的とし、令和6年度入学生から普通科を改編し、「社会共創科」を設置しました。

「社会共創科」の主な特徴は、次の三点です。

- 1 興味・関心のある探究活動分野を軸にしたコース選択
- 2 放課後の地域連携活動を充実させる特色あるカリキュラム
- 3 伝承や文学者を教材化する「地域文化と国語」などの独自の学校設定科目

これまで以上に地域連携活動を教育課程に組み込み、探究型・課題解決型学習を推進することで、生徒の多様な能力・適性、興味・関心に応じた学びの実現を目指しています。

また、令和6年度取組として、本校主催の地域活性化フォーラム「今を創る、未来を変えるトライブ」を開催しました。この企画には県内外7校、28名の高校生が伊方町に集まり、「えん」をテーマに地域ガイドや学生メンターと共に6つの集落でフィールドワークを行いました。さらに、愛媛県国際交流協会と連携し、在留外国人の実情を取材するなどして、多文化共生をテーマとした高校生新聞の作成にも取り組みました。

このように教職員自ら様々な教育活動に挑戦し、生徒に対して学びの範を示すことで、生徒の主体的な学びを促進し、地域社会の創り手となるリーダーの育成を目指しています。そして、本校が伊方町の学びの拠点としての役割を果たしていくことを強く願っております。

最後になりましたが、本事業の推進にあたり、ご支援・ご指導を賜りました関係者の皆様に心より感謝申し上げ、巻頭の挨拶といたします。

目 次

○ 巻頭言

○ 目次

I	概要	1
1	事業の概要	2
2	事業の目的等	4
3	実施体制	6
4	学際領域学科又は地域社会学科における取組	11
5	実施計画	15
6	成果の普及のための仕組み	19
7	国の指定終了後の取組継続のための仕組み	19
8	研究開発概念図	20
9	ロジックモデル	21
II	組織の取組	22
1	普通科改革支援事業以前の取組	23
2	コンソーシアム	24
3	管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について	26
III	研究開発	28
1	事業の実績	29
2	みさこうSTEAM教育	39
(1)	学校設定科目「未咲輝学」	39
(2)	みさこうSTEAM教育	41
(3)	県外視察研修	49
IV	評価・分析	56
1	ループリック	57
2	目標と実施状況	57
3	次年度以降の課題及び改善点	58
V	資料	59
1	「未咲輝学Ⅰ」ワークブック	60
2	伊方町の知名度アップで人口減少ストップ（さだ岬爆誕）資料	108
3	未咲輝ゼミ資料	111
4	表彰状等	119

I 概要

研究開発の概要

実施計画書（普通科改革支援事業）

1 事業の概要

（1）学際領域学科又は地域社会学科を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の種類	設置（予定） 年度	決定
公立	愛媛県立三崎高等学校 (えひめけんりつみさ きこうとうがっこう)	地域社会学科	令和6年度	○

※学科の種類は学際領域学科又は地域社会学科の別を記載すること。

※設置（予定）年度は令和4年度、令和5年度又は令和6年度を記載すること。

※教育委員会等における決定を経ている等、組織として設置が決定している場合には、「決定」欄に○を付すこと。

（2）学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	60名	学年制	社会共創科

※課程別は、全日制・定時制・通信制の別を記載すること。

(3) 当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

各教科において、「地域社会とつながる授業」と地域連携を軸とした新たな「教科等横断型授業」の実施を二つの大きな柱として取り組み、本校独自のSTEAM教育を実践する。

- ・これまで「総合的な探究の時間」を中心に行ってきた探究活動を、教科等横断的に行い、各教科の学習を実社会と結び付けることで、これまで以上に生徒の学びの自走性を高めるとともに、生徒の進路希望に合わせて一人一人に個別最適化された学習活動を実施する。

例) 理 科：再生可能エネルギーの発電効率の研究

商業科：プログラミングを用いたマーケティング

- ・地域課題の発見や解決へのアプローチなどを通して、これまで以上に地域社会と深くつながり、生徒の資質・能力を高めることで「ブーメラン人材」を育成する。

※ブーメラン人材…再び地域に戻り、進学先や就職先で身に付けた広い視野、高い専門性、豊かな人脈を利用して、生業・事業・産業を創出する人材。求められる資質・能力としては、郷土愛、地域活性化への使命感、課題解決力、ネットワーク構築力、コーディネート力などが挙げられる。

○地域社会とつながる授業

本校では、これまでも「総合的な探究の時間」や学校設定科目「未咲輝（みさき）学」で地域と連携して探究活動を行ってきたが、時間数が限られていた。今回、社会共創科の設置に当たり、地域探究活動に関する特色ある学校設定科目「地域文化と国語」（2単位）、「トライブ・ラーニング基礎」（1単位）、「トライブ・ラーニング」（2単位）、「せんたんコミュニケーション学」（2単位）など、地域資源を最大限に生かした、本校でしか学ぶことのできないオンリーワンの授業を展開する。

このことにより、地域社会とより深くつながる取組を実施できる。例えば、県外高校とのオンラインでの定期的な交流や中学校・企業などと連携した地域探究活動、地域の大人を巻き込んだキャリア教育などが挙げられる。また、令和3年度には専修大学から、更に令和4年度には大正大学からコンソーシアムに御参加いただき、オンラインによる協働プロジェクトの実施や来県した大学生との交流など、地元地域だけでなく、全国ともつながる探究活動を実施している。その際には、他県に先駆けて配備された1人1台端末を最大限活用し、ウェブ会議システムやチームコミュニケーションツールなどを利用することで、より充実した活動としている。

また、本校独自に、地域人材や外部人材などをリストアップすることにより、「地域特別講師データベース」を作り、地域探究活動の内容にあった人材をすぐに検索し、よりスマートな活動にすることとしている。

以上のような取組を実施することで、郷土愛や地域活性化への使命感など、「ブーメラン人材」に求められる資質・能力の育成につなげるとともに、実社会や日常生活の課題を発見・解決し、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことができる人材の育成につなげていきたい。

○教科等横断型授業

これまでのカリキュラムでは、各教科、単元において、教科等横断型授業の計画を作成する際の日程調整が課題となっていた。しかし、各教科においてあらかじめ教科等横断型授業を組み込んだ年間指導計画を作成しておくことで、スケジュールの管理が容易になり、計画的かつ継続的な教科等横断型授業の実施が可能となる。また、現在行っている「未咲輝（みさき）学」で導入しているデータサイエンスやプログラミング教育なども積極的に取り入れ、科学的な根拠に基づいた課題解決能力の育成にもつなげたい。

また、教科等横断型授業が、異なる教科の単なるコラボレーションになることがないよう、実社会や日常生活における課題を設定し、それを異なる教科の視点から解決していくことを通して、「多面的に学び、考える力」を身に付けさせたい。

以上のような取組を実施することで、新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」（他者に寄り添いながら協働していく思考）を身に付け、地域社会とつながることのできる人材の育成につなげていきたい。

2 事業の目的等

(1) 学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科を設置する必要

○本校を取り巻く状況

西宇和郡伊方町唯一の高等学校である本校では、進学や就職を機に都市部へ転出する生徒が多く、地域活動の担い手不足が深刻化している。このような状況の中、本校では、進学先や就職先で身に付けた広い視野、高い専門性、豊かな人脈を地元に戻って活用し、生業・事業・産業を創出する「ブーメラン人材」の育成を目標として、地域との協働活動に積極的に取り組むことができるカリキュラム開発や、コンソーシアムの構築などに取り組んできた。このような取組を通して、町内における高等学校の立ち位置を、地域の若者を町外へ送り出す「出口」から、町内はもちろん、全国の若者を呼び込み地元への定着率を向上させるとともに、「ブーメラン人材」が他地域とのパイプ役となることで移住者を増加させ、持続可能な地域を創ることができる「入口」へ変化させてきた。

○「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」以前の取組（H27～H30）

主に地域住民や団体など地域側のニーズに応える形で多くの活動を実践し、地域全体を学びの場として捉え、地域課題の解決を目的とした地域探究活動を行うことで、調整力やコミュニケーション力などの生きる力を育んできた。その中で、生徒の主体性を育む活動に重点を置き、県内外の高校生や大学生を招聘し、各地の地域活性化活動事例を発表・共有し、より高度な活動に向けたネットワーク形成の場として、全国の高校生・大学生等と交流を持つ高校生シンポジウム「せんたんミーティング」を主催するなどの取組を行った。一方で、カリキュラムの編成上、体系立った効果に導きづらい側面も見られた。

○「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」での取組（R元～R3）

それまでの課題を踏まえ、生徒の自主的な取組を活動の中心に据えながら、より高度な新カリキュラムの編成や組織編成に取り組み、「地域理解」「地域課題の発見・解決」「ブーメラン人材の育成」を3年間継続して行うことができる学校設定科目「未咲輝（みさき）学」の開設・運営を中心とした整備を行った。また、組織づくりとしては町役場や地元NPO団体といった、地域に深く根差した団体に加え、県内外の大学等の教育機関にも参加していただき、地域の実態に即したコンソーシアムを編成した。これらの取組により生徒たちの地域探究活動はこれまで以上に広がりや深みを増すことになった。年度当初と年度末に行っているルーブリックを用いた生徒の自己評価において、計画力、判断力、実践力、調整力、コミュニケーション力という全ての項目で、年を追うごとに成長が見られた。本校の地域探究活動は、外部人材と関わりながら生徒自身が企画・実践を進めていくという特徴があるため、特に、生徒の計画力、調整力、コミュニケーション力をしっかりと育むことができた。また、平成31年度入試から本格的に県外生徒募集を開始し、本校の教育活動に関心を持った県内外からの入学生が増加したことで、地域からも高く評価していただいております、新しい学校の在り方や教育活動について研究を重ねた。

○必要性

以上のことを踏まえ、「学校」ではなく「地域」という枠組において、生徒一人一人に個別最適な学びをこれまで以上に提供していく必要があると考えている。そのためには、学校内外の多様な人たちと関わり、対話しながら、生徒を「社会に生きる一人の人間」としてたくましく育てていくことができる学校づくりを推進していくことが必要不可欠である。「社会とつながり、たくましく生き抜くことができる生徒の育成」を目標とし、外部人材との連携に加え、各教科・科目における単元の縦断化や教科等横断型授業などを柱としたカリキュラムの再編を高いレベルで行っていくためにも、本校が社会共創科を設置する必要性があった。

(2) 学際領域学科又は地域社会学科における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

○目的

- ・「社会に生きる一人の人間」として、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことができる人材の育成
- ・新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」を身に付けることで、地域住民の視点に立った課題やニーズを発見・解決することができる、地域社会とつながる人材の育成

○目標

- ・「ブーメラン人材」を育成することによる、地元への人材の定着率の向上
- ・自らが「ブーメラン人材」として、他地域とのパイプ役となり移住者を増加させることによる、持続可能な地域を作ることができる地域人材の育成
- ・地域課題の発見・解決に取り組む地域探究活動による、生徒自身の進路実現と結び付く仕組みの構築

○背景

本校の位置する伊方町は、日本一細長い佐田岬半島の先端に位置し、主な産業は農業や漁業という町である。本校は伊方町の最西端である三崎地区にあり、隣町までは車で 40 分程度を要する。伊方町は高齢化率が 47%を超えており、愛媛県内で 2 番目に高い自治体である。少子高齢化の急速な進展による年少人口の減少に加え、高校卒業後、進学や就職を機に都市部へ転出する若者が多いことなどが現在の状況を招いている。

○教育を通じて育成を目指す資質・能力

- ・本校は地元をはじめ、県内各地や全国各地から多くの生徒が入学しており、全校生徒の半数以上が寮生活を送っている。このような状況において「地元」や「地域」という言葉の指し示す範囲を再定義するとともに、将来的に日本中に本校及び伊方町の関係人口を増やすことができる好機と捉え、バックキャスティング的に現在必要とされる教育活動を行う必要がある。
- ・社会共創科を設置したことで達成すべき資質・能力として、「社会に生きる一人の人間」としてたくましく生き抜く力が挙げられる。この力は、少子高齢化や産業の衰退という社会課題最先端地域である伊方町全体を学びの場として、地域人材を外部専門家として定義し、地域と関わり地域の中での探究活動を推進することで、生活に根差した形から育成される。
- ・学校を含んだ伊方町全体を大きな学びのフィールドとした 3 年間の継続した活動を通して、伊方町への愛着を深め、生涯にわたり本校及び伊方町と関わっていく姿勢も育む。これにより、伊方町の関係人口を増やすことに加え、「地域特別講師データベース」を継続させ、地域の活性化につなげることができる。
- ・生徒は、自分たちのアイデアが、地域にとって有用か、実現可能か、持続して取り組むことができるかなど、検討・実践・改善を繰り返す中で、課題を発見・解決するための方法や手段を体系化し、汎用性のあるデザイン思考として身に付けていくこととなる。地域探究活動では、地域住民と対話してニーズを聞き取る共感力や対話力、協働的な解決方法のアイデアを生み出す力を育成し、現状をよりよい状況へ改善することを目的に、自らの行動指針を決定できる資質・能力を育成する。
- ・自己理解なくしては、地域を理解し適切に関わることや地域探究活動における適切なゴールの設定は困難である。また、地域探究活動を通して正しく社会と関わっていくためには、その基礎となる教科の力が必要である。しかし、生徒は地域探究活動に必要な力と教科において育成する力とを分けて考えてしまう傾向にある。そこで、自らの地域探究活動の計画やゴールを設定する際に、その達成のために必要な力を各教科においてどのように育成していくのかを生徒自身に考えさせ、成果の検証において振り返らせることで、地域探究活動を核としたより深い教科等横断的な学習を実現するとともに、教科等で身に付けた力を実社会で生かし活用する力を育成する。

3 実施体制

(1) 管理機関における実施体制や事業の管理方法

○実施体制

(1) 管理機関の役割

三崎高校が社会共創科における教育課程の編成や新しい学校設定科目について検討する際に、新学科のカリキュラムが充実したものになるよう支援することとしている。また、運営指導委員会を設置し、県内外の有識者から指導・助言、成果に関する評価をいただき、本事業の運営に生かしていく予定である。

教職員体制に関する支援もすでに行っており、小規模校で地域探究活動に取り組むことを希望する優秀な教員、三崎高校出身の優秀な教員及び同校勤務年数が長いベテラン教員を配置している。また、同校におけるICT活用に関する教員・生徒への支援のため、ICT教育支援員を県の一般財源で配置している。

(2) コンソーシアムの構成及び役割

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で構築された三崎高校のコンソーシアムは、多面的な立場から多くの助言をいただくことによって、教育活動の充実に結び付いており、同事業終了後も、コンソーシアムは継続し、令和4年度からは、大正大学、株式会社 Prima Pinguino、株式会社伊予銀行に新たに参入していただいている。

コンソーシアムは、立案された計画や実施状況に基づく助言等を踏まえて、プロジェクト全体に対する提案・支援等を行う。実際の活動において求められる支援としては、事業実施中のプロジェクトに対する新たな視点からの提言や、その実現を可能にする外部人材の紹介・調整等が挙げられる。また、コンソーシアム関係者も各教科の授業や地域探究活動の講師として招くことで、生きた組織として活動していくとともに、三崎高校の教育目標を共有した上で、豊かな学びの土壌を醸成することができるコンソーシアムの編成を目指す。

(3) コーディネーターの配置（委託費）

高校と地域社会の協働体制づくり、地域社会に開かれたカリキュラムづくり、新たな人の流れと多様性ある教育環境づくりなどを行うため、スムーズかつ的確に三崎高校と関係機関をつなぐ「地域魅力化コーディネーター」を令和4年8月1日から雇用している。他県での教職経験や一般企業での海外勤務経験などの豊富な経験を生かし、学校内外で積極的に活動している。

○事業の管理方法

管理機関である愛媛県教育委員会は、これまで「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」（本県事業）、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」など、地域協働に関する様々な事業の管理・運営に関わってきた。また、本県高校等がSGHの指定を受けた経験や、現在SSHの指定を受けている学校もあるため、これまでに蓄積してきた事業成果やネットワーク等を生かし、三崎高校に助言を行うとともに、本事業において他団体や外部人材を積極的に活用する。

三崎高校では、各年度を3期に分けてスケジュールを立てており、カリキュラム編成のための校内会議を各学期1回の年間3回行い、長期休業中には校内研修や先進校との情報交換等も実施している。これらのスケジュールを管理し、適切に事業が行われるよう指導するとともに、会議の内容について報告を受け、助言等を行う。

また、運営指導委員として、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で運営指導委員を委任した方々に加え、大正大学地域創生学部教授である浦崎太郎氏、株式会社 Prima Pinguinoの代表取締役である藤岡慎二氏にも加わっていただき、浦崎氏には委員長を務めていただいている。浦崎氏及び藤岡氏からは、社会共創科の教育課程の編成等において、高校と地域との協働の視点から、専門的なアドバイスをいただいている。このように、大学研究者や地域教育の中核となる人材に、指導・助言していただくことで、三崎高校の事業が同校の生徒、教職員だけではなく本県全体の財産となるよう管理・運営する。

※運営指導委員会、コンソーシアム代表者会議ともに年2回開催。

(2) 管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

○事業全体の成果検証について

本事業の成果検証については、以下のことを通して、管理機関が責任を持って行い、三崎高校にフィードバックすることとする。

- ・運営指導委員会及びコンソーシアム代表者会議において、進捗状況の確認及び改善点等を協議
- ・三崎高校が校内成果発表会を開催したり、各種発表会へ参加したりするなど、幅広く情報を発信
- ・愛媛県教育委員会が主催し、県内高校等が、指定を受けた各種事業の取組や、独自の研究実践について発表し、その成果を広く高校生・中学生にまで普及する「えひめスーパーハイスクールコンソーシアム」で、同校が発表し成果を普及
- ・学校及びコンソーシアム等で、学校評価やアンケートを実施
- ・卒業生の追跡調査を行い、特に県外進学者・就職者の動向を調査
- ・ループリックを用いて、生徒個人の振り返りを実施 など

○評価のための体制・考え方

評価については、三崎高校が本事業において目指している「社会とつながり、たくましく生き抜くことができる生徒の育成」が達成されているかに注目し行うこととする。

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で構築した校内や運営指導委員会等からの評価体制に加え、地域の人や卒業生、現在交流のある県外の高等学校などにもアンケート等を実施し、より多くの人から客観的な評価をいただき、事業の運営に生かすこととしたい。そのためにも、コンテストや発表会への応募、ホームページやSNS、フリーペーパーなどでの情報発信などを行うこととしている。

また、具体的な成果目標については、目標設定シートにある以下の観点に基づいて行っていくこととする。

- ・生徒による3年間の地域探究活動を通して、地域を担う人材としての資質・能力の向上度
- ・大学等進学者数のうち、将来、地方創生関係の大学・学部等への進学者数
- ・高等学校卒業後及び大学等卒業後の出身地への就職者数の割合

年度末に、成果検証とともにこれらの評価を行い、実施内容やカリキュラムなどを修正し、学校はもちろん、地域や県外の方からも評価していただける学科にしたいと考えている。

(3) 学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校における事業の管理方

○事業の管理方法

本校が平成 27 年度から築き上げてきた地域探究活動の実施体制において、本事業の管理を行う。本校では、校務分掌として平成 29 年度に地域協働課を立ち上げ、地域探究活動の窓口として活動に取り組んできた。本事業においても、地域協働課を中心とした校内運営組織を作り、事業を推進していく。

○具体的な方策

(1) 地域社会とつながる授業

「総合的な探究の時間」において研究テーマごとに生徒を縦割りにしたグループ（以下、「研究グループ」という。）に、複数の担当教員を配置し、全教職員が地域探究活動に関わることで、研究グループごとに生徒がオンライン上で活動記録を記入し、担当教員が確認することで活動の記録及び管理を行う。本事業においては、これまで行ってきた地域探究活動の実施体制を基にしながら多様な資質・能力、興味・関心を持つ生徒一人一人が、より主体的に活動することができるよう、グループでの地域探究活動の在り方や、探究サイクルを分割することによる地域探究活動の高密度化などの新たな実施体制づくりに取り組む。

(2) 教科等横断型授業

単元縦断及び教科等横断的な取組を推進していくために、定期考査終了後など、新単元に入るタイミングにおいて、校内カリキュラム検討会を開く。また、毎年校内で実施している研究授業において、教科等横断的な内容による研究授業を、年に複数回実施することで、教職員の研修の機会を確保する。

(3) 地域協働課員の役割

地域協働課員は、必要な外部人材の紹介、調整を行ったり、研究グループごとの連携を図ったりするなど、担当教員をサポートする。また、研究グループの担当教員や代表生徒が定期的に進捗状況等を話し合う場を設定することで、各研究グループがスムーズな情報交換を行い、それぞれ連携したり、サポートし合ったりしやすい環境を作っていく。さらに、本事業において設置されるコーディネーターと連携を取ることで、これまで以上に校内外の人材の交流を促進する。生徒を活動の中心に置き、複数の担当教員がサポートし、その外側で地域協働課がサポートしながら、研究活動全体をマネジメントしていく。また、各研究グループでの代表生徒が、学校の代表として地域おこし活動を行う「せんたん部」を運営し、月に 1 回程度情報交換会を行う。

(4) コーディネーターの役割

外部とのハブになり、地域における探究活動をスムーズに実施できるよう外部人材と連携する。さらに、開かれた学校としてコンソーシアムをはじめとした地域や関係者の方々に本事業を含めた、学校活動全体のサポートを行う。

月に 2 回程度、授業担当教職員とコーディネーターが、「総合的な探究の時間」や「未咲輝（みさき）学」等における探究学習の進捗状況の報告及び今後の活動方針検討のための会議を実施する。また、コーディネーターは職員室に常駐し、探究学習がより効果的なものになるよう、日頃から密に教職員や地域の方などと情報交換を行う。

(4) 管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

- 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」以前の実績（H27～H30）
 - ・地域の和菓子店との協働で新たな特産品となる地元佐田岬産の温州みかんを用いた「みっちゃん大福」を研究開発（H27）。のちに、「こんなのあるんだ！大賞 2019」大賞を受賞（R元）。
 - ・漂着物であるブイ（魚等の養殖で使う直径 30 センチメートルほどのプラスチック製の浮き）を中心とした漂着物を再利用し、地域の方と協働して制作したブイアート作品「登龍門」が「えひめ愛顔（えがお）のこども芸術祭」でグランプリとなる県知事賞を受賞（H28）。

※この取組は現在の生徒にも受け継がれ、アート作品の制作だけではなく、ブイを使ったスポーツイベント「ブイリンピック」を開発し、地域のイベントや地元中学校の運動会で実施されている。また、大分県で開催された楽しみながら環境について考えるイベント「おおいたうつくし感謝祭」において、令和3年度からブイアート作品を出展するなど、現在も活動の幅を広げている。
 - ・高校生シンポジウム「せんたんミーティング」を立ち上げ、高知県立須崎高等学校、香川県観音寺市の高校生まちづくりグループ、愛媛県立野村高等学校、愛媛大学、名城大学、尾道市立大学等の、高校生・大学生を招聘し活性化事例を共有するシンポジウムを行い、生徒自らが、準備（手配・広報・会場設営等）や当日運営（司会・受付・機器類オペレーション・まちあるき）などを実施（H29～）。
 - ・生徒自らが地域住民へのインタビューや調整をはじめとした制作業務を担うとともに、上映会の実施運営も行った地域PRのための短編映画「せんたんビギンズ」の撮影及び上映（H30）。
- 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の実績（R元～R3）
 - ・町内の一つの集落全体を舞台と見立てて各研究班がそれぞれの研究成果を発表する「せんたん劇場」を開催（R元）。
 - ・廃校となった地域の中学校を舞台に 15 以上の外部団体と二つの高校に参加してもらった「みさこうマルシェ（廃校活用イベント）」を開催（R元）。
 - ・地元の海水から自分たちで精製した塩を使って開発したオリジナルスイーツを提供する「みさこうcafé」をオープン（R2）。
 - ・「えひめ地域づくりアワード・ユース 2020」最優秀賞を受賞（R2）
 - ・「第3回ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会」金賞並びにベストカテゴリー賞・銅賞を受賞（R3）
 - ・「EGFキャンパスアワード」優秀賞を受賞（R2・R3）
 - ・三浦工業賞を受賞（R3）
 - ・「第8回ディスカバー農村漁村（むら）の宝」特別賞【先端発信賞】を受賞（R3）
 - ・「第12回地域再生大賞」優秀賞を受賞（R3）
- 「新時代に対応した高等学校教育改革推進事業（普通科改革支援事業）の実績（R4～R6）
 - ・「ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会」銀賞並びに銅賞を受賞（R4・R5）
 - ・日本財団 海と日本 PROJECT「愛媛の海 釣ってさばいて甲子園 in 三崎」を開催（R4・R5）
 - ・日本財団 海と日本 PROJECT「マリンチャレンジプログラム」支援対象研究認定（R4）
 - ・エシカル甲子園 2022「私たちが創る持続可能な社会～つなぐ、つながる、ミライのエシカル～」四国ブロック第2位（R4）
 - ・「今を創る、未来を変えるトライブ～Engage the present, Shape the future. ～」を開催（R5）
 - ・「全国高校生『地域の自然』甲子園（ネイチャー甲子園）」生きもの調査部門動物の部第3位（R5）
 - ・「いやしの南予 BBQ 甲子園」最優秀賞を受賞（R5）
 - ・内閣府地方創生推進室「地方創生政策アイデアコンテスト 2024」優秀賞を受賞（R6）
 - ・「えひめ地域づくりアワード・ユース 2024」優秀賞を受賞（R6）

(5) 運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
大正大学地域創生学部	浦崎 太郎	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」企画評価会議 座長
愛媛大学社会連携推進機構	秋丸 國廣	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」運営指導委員
株式会社 Prima Pinguino	藤岡 慎二	総務省地域力創造アドバイザー 産業能率大学経営学部 教授
いよぎん地域経済研究センター	森 洋一	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」運営指導委員
文部科学省総合教育政策局	西村 久仁夫	
佐田岬半島ミュージアム	高嶋 賢二	
伊方町役場総合政策課	谷村 栄樹	
伊方町教育委員会事務局 佐田岬半島ミュージアム	阿部 茂之	
伊方町立三崎小学校	黒田 立史	
伊方町立三崎中学校	野村 雅英	

(6) 運営指導委員会が取り組む内容

- 運営指導委員会は、年に2回以上開催し、事業の運営や実施状況等について専門的見地からの指導・助言、成果に関する評価をいただく。生徒一人一人の能力・適正、興味・関心等に応じた学びを実現するためには、地域社会との協働活動は必要不可欠であり、その実現のための実施体制の構築支援等に特に注力していく。
- 大学研究者や地域教育の中核となる人材に参加していただくことで、三崎高校の事業が普通科改革の実現及び高校魅力化の先進事例として、同校の生徒・教職員はもちろんのこと、愛媛県全体の財産となるよう管理・運営する。

4 学際領域学科又は地域社会学科における取組

(1) 学際領域学科又は地域社会学科におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容（学校設定教科・科目の詳細は別添1「学校設定教科・科目の設定に関する説明資料」に記載。）

○本事業における本校の目的

- ・「社会に生きる一人の人間」として、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことができる人材の育成
- ・新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」を身に付けることで、地域社会とつながる人材の育成

これらを実現するために、各教科において「地域社会とつながる授業」と、地域探究活動を軸とした新たな「教科等横断型授業」の実施を大きな柱としている。これらの取組を進める中で、外部専門家や地域人材等との協働体制の構築に取り組むとともに、本校独自のSTEAM教育を実践し、生徒に幅広い視点を身に付けさせることを目的としている。

○地域社会とつながる授業

- ・「総合的な探究の時間」の活用
 - 地域探究活動の深化
 - 地域を生かしたキャリア教育
 - 中学校と連携した地域探究活動
- ・学校設定科目「未咲輝（みさき）学」（総合）
 - 地域理解（地域の歴史や地元企業について学ぶ）
 - データサイエンスを学び、「RESAS（地域経済分析システム）」や「e-Stat（政府統計の総合窓口）」などのビッグデータの利活用
 - 地域探究活動や起業家育成プログラムなどを実施
 - ※データサイエンスを学び、ビッグデータを用いて、地域課題をエビデンスに基づいて分析することで、地域探究活動や起業に関する学びを深めることができる。
- ・県内外高校との連携（現在、宮崎県立飯野高校や立命館宇治高校等と連携中）
- ・大学や企業との連携
- ・その他の特色ある学校設定科目
 - ◆「トライブ・ラーニング」（総合）：持続可能な地域づくりの観点から課題解決方法を考える力（デザイン力）を育成。
 - ◆「せんたんコミュニケーション学」（総合）：情報収集、分析、活用能力やICT活用能力を育成
 - ◆「地域文化と国語」（国語）：地域の伝承や文学者を教材とし、吟行や拓本などの体験活動を実施

○教科等横断型授業（社会をたくましく生き抜く人材の育成）

- ・年間指導計画に組み込み、計画的に実施
- ・実社会や日常生活の課題について、異なる教科からアプローチ
- ・「多面的に学び、考える力」を育成
- ・本校独自のSTEAM教育を実施
- ・教科等横断型授業の例
 - 「言語文化（韻文学）」→国語×英語×美術×数学
 - 「環境」→理科×商業×芸術
 - 「防災」→理科×保健体育 など

(2) コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

- 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」において構築したコンソーシアムを基に、本事業でも関係機関との連携・協力体制を構築する。令和元年度に8団体でスタートした本校コンソーシアムは、令和3年度には12団体、令和4年度以降は15団体で構成し、地域探究活動を通して多くの人々となつがり、協力体制を築くことができている。コンソーシアム関係者は、年に2回の会議だけではなく、オンラインを活用した遠隔授業、学校設定科目「未咲輝（みさき）学」での特別授業、放課後活動である「未咲輝ゼミ」など積極的に教育活動に参画している。また、コンソーシアム関係者とは、令和4年度から定期的にオンライン等も活用しながらコミュニケーションを図っており、今後も継続していく予定である。本事業においては、本校の特色である地域とつながる地域連携授業や、地域を軸とした教科等横断型授業の推進のため、「総合的な探究の時間」や「未咲輝（みさき）学」以外の各教科の授業においても、コンソーシアム関係者に積極的に参加していただくことになっている。また、学校外での活動では、地域行事やインターンシップなど、地域探究活動における生徒の受け入れをコンソーシアム関係者に依頼することを計画している。
- 本事業で配置されたコーディネーターが、コンソーシアムなどの外部との連絡・調整等の業務を担うことで、担当者の負担軽減及び本事業のスムーズな運営が可能になっている。また、コーディネーターは、関係機関との連携・協力体制の構築において重要な役割を果たすことから、業務内容や、地域人材の活用方法等の詳細については、各種研修会などに積極的に参加することで他県の先進校や大学関係者等から情報を収集し、より効果的な運用ができるよう研究を行っている。

(3) コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
愛媛大学	笠松 浩樹	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」 コンソーシアム構成団体
専修大学	大崎 恒次	
大正大学	浦崎 太郎	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」企画評価会議 座長
一般社団法人佐田岬Sプロジェクト	宇都宮 圭	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」 コンソーシアム構成団体
NPO法人さだみさき夢希会	田村 義孝	
NPO法人二名津わが家亭	増田 克仁	
佐田岬みつけ隊	黒川 信義	
一般社団法人E.Cオーシャンズ	岩田 功次	
MIGACT	濱田 規史	
株式会社Prima Pinguino	藤岡 慎二	総務省地域力創造アドバイザー 産業能率大学経営学部 教授
株式会社伊予銀行	松岡 健夫	金融教育講演会講師
伊方町役場総合政策課	宮本 廉	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」 コンソーシアム構成団体
伊方町教育委員会委事務局	矢野 喜久	
愛媛県教育委員会高校教育課	川本 昌宏	
公営塾未咲輝（みさき）塾	関本 岳朗	

(4) 配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名
愛媛県立三崎高等学校	石本 冨 (いしもと さえ)

当該者の主な実績

石本氏は、他県での教職経験や一般企業での海外勤務経験などの幅広い経験を生かし、校内外を問わず、新事業に係る校内諸行事の企画立案や外部人材との連絡・調整などを行っている。

具体的には、「総合的な探究の時間」や「未咲輝（みさき）学」のアップデート、地域探究活動に関係する新しい学校設定科目「トライブ・ラーニング」等の立案、「地域特別講師データベース」の構築などを行っている。また、本校教員や生徒とともに、本校の魅力を全国の中学生に向けた発信をするなど、精力的に活動している。

コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

○取り組む内容

- ・社会共創科における新しいカリキュラムの研究開発を行う。
- ・「地域社会とつながる授業」と「教科等横断型授業」の年間指導計画と実施内容の検討を行う。
- ・伊方町3地区に配置されている伊方町のコーディネーターと連携を図り、情報共有を行いながら、それぞれの地区の課題解決に向けて活動する。また、それぞれの地区に担当教員を配置し、地域、学校、コーディネーターの三者が常に連携をとることで、充実した地域と学校の連携・協働の推進に取り組んでいく。
- ・地域探究活動を行う際、コンソーシアムなどの外部機関との連絡・調整を行う。
- ・地域探究活動における教員・生徒のサポートを行う。
- ・「地域みらい留学」などにおいて、県外生徒募集活動のサポートを行う。
- ・本校独自の「地域特別講師データベース」を立ち上げ、その運用を行う。
- ・社会共創科での地域探究活動などについて、ホームページやSNS、メディア等で情報発信を行う。 など

○勤務形態

- ・勤務時間：1日7時間、週5日、35時間の勤務
- ・三崎高校の職員室に常駐する。校務分掌を割り当てられており、地域協働課の一員として、地域探究活動の企画・準備・運営などに、地域協働課員をはじめとする教職員や地域住民とともに取り組んでいく。また、コンソーシアム構成員と定期的な意見交換を行う場を設定し、円滑な業務の実施をサポートする。

(5) 学際領域学科又は地域社会学科の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

生徒・保護者へは、本校で実施する「中学生一日体験入学」、各中学校での高校説明会、一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム主催「地域みらい留学」、本校HP・SNS（Instagram 等）による説明を行うとともに、地域の方々へは、シンポジウム（運営指導委員やコンソーシアムの参加者の中から6名程度の方に依頼）や学校評議員会等での説明会を実施した。また、校外でのフォーラム等に積極的に参加し、社会共創科の説明を行っている。説明の中では次の内容で、今後の三崎高校の方向性を明確に打ち出している。

○新学科へ変更する目的

伊方町では、少子高齢化が急速に進み、人口減少、高齢化率の上昇は、大きな課題となっている。そこで、伊方町では平成28年度から「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、「伊方町移住定住促進協議会」を発足させるなど、町ぐるみで人口流出対策に取り組んでいる。

本校も、伊方町唯一の高校として同協議会の構成メンバーに加わり、伊方町と連携し魅力化創出活動に取り組んできた。また、令和元年度から「地域との協働による高等学校改革推進事業（地域魅力化型）」による取組を行ってきたが、「総合的な探究の時間」と学校設定科目「未咲輝（みさき）学」の中での学習が中心であった。

今回、社会共創科の設置に当たり、特色ある学校設定科目を新たに設置し、探究的な学習や体験活動等を通じ地域社会と協働しながら、地域課題の発見、解決に必要な資質・能力を育成する地域探究活動を充実させることとした。

このような地域探究活動を通じて、生徒は、社会をたくましく生き抜く力や「デザイン思考」を身に付け、地域社会とつながる人材に成長すると考えている。

○特色ある新学科と教育課程及び進路指導

現在、就職・専門学校進学希望者、文系大学等への進学希望者、理系大学等への進学希望者に対応した3種類のコースに分かれて教育課程を編成している。

今回、社会共創科の設置に当たり、現在あるコースの内容を見直し、地域探究（地域に根差した探究活動を核として各教科において探究的な活動を主とした学習活動を行うコース）、人文探究（地域探究活動や探究的な活動を基に主として人文社会学分野の学習を行うコース）、科学探究（地域探究活動や探究的な活動を基に主として科学分野の学習を行うコース）とし、多様な生徒のニーズに応えていくこととした。また、社会共創科が特に力を入れる「地域社会とつながる授業」と「教科等横断型授業」により、課題解決力や論理的思考力等を身に付けることができるとともに、学びの強い動機付けとなり、学習意欲がアップし、進路実現の一助となる。また、地域探究活動を通して向上が期待できる、論文を作成する力やプレゼンテーション力などは、各種推薦入試等で重要な要素となる。

5 実施計画

(1) 3ヶ年の実施計画の概要

○令和4年度（1年目）

- ・コーディネーターを配置し、すでに伊方町3地区に配置されているコーディネーターや本校教員と連携させることで、高校をハブとした連携組織を作成する。
- ・コーディネーターと地域協働課の教員が中心となって、地域人材をリストアップした本校独自の「地域特別講師データベース」を作り、講師を登録し、授業や地域探究活動などへ派遣するためのスケジュール調整等を行う。また、作成したデータベースを活用して、地域と連携した学習活動を各科目で年間一回以上行う。
- ・年間指導計画を見直し、「教科等横断型授業」を組み込むことで、現在の教育課程の中において、「総合的な探究の時間」及び「未咲輝（みさき）学」と各教科の連携授業などを実施する。
- ・本事業に係る新たな活動の企画・立案を行う。（「みさこうゼミ」、「イベントカレンダーワークショップ」、「job フェア in みさこう」などを計画。）
- ・社会共創科における令和6年度入学生の教育課程の研究及び編成を行う。校内のカリキュラム編成委員会で、大学関係者など外部の専門家の助言を受けることで、生徒にとってベストな教育課程を編成する。
- ・令和6年度入学生には、学科名やカリキュラムなどの構想が固まった時点で、中学校の説明会やホームページ、SNSなどで、特に中学2年生とその保護者に、強くアピールしていく。地域に対しても、伊方町役場等にも協力を得ながら、広報活動をしていく。

○令和5年度（2年目）

- ・本格的に、新学科の詳細及び特色を中学3年生とその保護者に向けて、アピールする。現在行っている本校の「中学生一日体験入学」や各中学校の説明会での情報発信に加え、本校独自の説明会を行うなどして、積極的に新学科設置の趣旨とその魅力の普及に努める。
- ・新学科の教育課程を完成させ、愛媛県教育委員会に申請する。
- ・「みさこうゼミ」、「イベントカレンダーワークショップ」、「job フェア in みさこう」などを実施する。
- ・「地域社会とつながる授業」と「教科等横断型授業」について、前年度の改善点などを抽出し、校内のカリキュラム検討委員会等で協議する。
- ・「今を創る、未来を変えるトライブ」を開催する。

○令和6年度（3年目）

- ・社会共創科を設置する。
- ・新しい教育課程での授業実践や、地域探究活動などの教育活動を行いながら、その効果や改善点などの確認を行っていく。
- ・1年間を通しての長期の検証に加え、各学期で中期的なPDCAサイクルを構築することで柔軟に修正を加えながら、生徒や学校、地域の実態に合った社会共創科へとブラッシュアップしていく。
- ・本事業のコーディネーターの役割や業務内容、伊方町のコーディネーターとの連携についても、実態に即した運用ができるように関係者で定期的に協議する。
- ・「地域特別講師データベース」についても、事業全体の必要性を図りながら積極的に新しい人材の開拓を行う。

(2) 令和6年度の実施内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	・社会共創科設置 ・「総合的な探究の時間」についてのガイダンス	
5月	・未咲輝（みさき）学Ⅰ「地域理解」スタート（1年生） ・未咲輝学Ⅰ「地域めぐり」活動スタート（1年生） ・未咲輝学Ⅱ「RESAS」スタート（2年生） ・未咲輝学Ⅲ「起業にむけて」スタート（3年生） ・トライブ・ラーニング基礎スタート（1年生） ・未咲輝ゼミスタート ・地域の行事「はなはな祭り」に参加（希望者）	・佐田岬半島ミュージアム 高嶋賢二 氏、前田美和氏、佐田岬みつけ隊 黒川信義 氏を講師として招聘 ・佐田岬半島ミュージアム 高嶋賢二 氏、前田美和氏、佐田岬みつけ隊 黒川信義 氏を講師として招聘 ・伊予銀行、伊方町役場、STNet 田口氏と連携協働 ・伊予銀行、MIGACT 濱田規史 氏と連携協働 ・地域人材データベースを活用 ・伊方町観光交流拠点施設「佐田岬はなはな」との連携
6月	・未咲輝学Ⅲ「インターンシップ」実施（3年生）	・伊方町内を中心とした企業
7月	・第1回運営指導委員会・コンソーシアム開催 ・三崎港海底清掃（希望者） ・オープンハイスクール開催（1年生）	・三崎漁協と協働
8月	・「瀬戸の夕風祭り」参加（希望者）	・伊方町役場瀬戸支所と連携協働
9月	・未咲輝（みさき）学Ⅱ「RESAS」中間報告会（2年生） ・みさこう郷土芸能部活動スタート（希望者） ・1年生「ソーシャルチャレンジ for High School 事業」の実施 ・伊方町ワールドツアーボランティア（希望者） ・イロドリフェスティバル運営及び参加（未咲輝ゼミ） ・みさこうフェスティバル開催（全学年）	・伊予銀行、伊方町役場と協働 ・三崎地区青年団と連携協働 ・三崎保育所、社会福祉法人伊方社会福祉協会（つわぶき荘）との連携協力 ・伊方町役場と協働 ・三崎保育所、三崎小学校、三崎中学校、瀬戸中学校、伊方中学校と協働

10月	・「ふるさとCM大賞」作品提出（希望者） ・エネルギー教室実施（1年生） ・未咲輝（みさき）学Ⅱ「地方創生☆政策アイデアコンテスト2024」プラン提出（2年生）	・伊方町役場、有限会社ティムスと協働 ・四国電力と連携
11月	・みさこう郷土芸能部発表（希望者） ・未咲輝（みさき）学Ⅰ「地域理解」ポスター掲示（1年生） ・未咲輝（みさき）学Ⅱ「RESAS」ポスター掲示（2年生） ・渚のエメラルドマルシェ運営（未咲輝ゼミ） ・第3回釣ってさばいて甲子園（未咲輝ゼミ） ・森林教室実施（2年生） ・保小中高合同防災訓練実施（全学年）	・三崎地区青年団と連携協働 ・日本財団「海と日本プロジェクト」と協働 ・日本財団「海と日本プロジェクト」と協働 ・南予地方局と連携 ・三崎保育所、三崎小・中学校、三崎地区自主防災組織及び消防団と協働
12月	・進路相談会 ・未咲輝（みさき）学Ⅱ「地方創生☆政策アイデアコンテスト2024」全国大会出場（2年生） ・えひめ地域づくりアワード・ユース2024 出場（有志） ・「今を創る、未来を変えるトライブ」の実施	・大学生、同窓生、地域企業・行政、大学教授との連携
1月	・令和6年度スーパーハイスクールコンソーシアム in 南予（代表者） ・「未咲輝（みさき）-SENTAN-発表会」開催（全学年） ・グローバルリーダーズ summit 参加 ・愛媛・南予の柑橘農業システム農業フォーラム（有志）	・宮崎県立飯野高校と連携協働
2月	・第2回運営指導委員会・コンソーシアム開催	

(3) 事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み（事業のアウトプットやアウトカムの考え方、目標指標の設定は別添2「目標設定シート」に記載。）

○教育活動全般について

- ・学校長のリーダーシップの下、全教職員で共通認識を図りながら学校で一丸となって、本事業をスムーズに運営できるよう努める。
- ・各学期末には、職員会議等で進捗状況の確認や実施事業の振り返りを行う機会を設ける。
- ・Teamsなどのチームコミュニケーションツールを用いることで、気付いたことや提案等をいつでも気軽に共有できる校内の仕組み作りを行う。
- ・本事業の進捗状況や打ち合わせの内容、生徒及び教職員からの提案、授業研修会で出た意見などは運営指導委員会・コンソーシアムで共有し、多くの人から評価及び助言をいただくことで、事業の進捗状況の確認及び改善を図る機会とする。

○授業について

- ・校内の2クラスを指定した一般公開の「焦点授業」を実施し、地元中学校の教職員にも参観していただき、その後、授業研修会を実施する。
- ・「焦点授業」のうち、1クラスは「地域社会とつながる授業」を実施し、授業改善や教員、生徒の意識改革につなげる。

（実践事例）「言語文化」

『奥の細道』を学習後、伊方町出身で現代を代表する俳人である坪内揆典について学習を行うとともに、実際に俳句を作り鑑賞するという授業を行った。作成した俳句を本年度から伊方町教育委員会が開催している「佐田岬トーク」に投句した。「佐田岬トーク」は2か月に1回開催されているが、その後も継続的に投句する生徒もあり、これまでに1名が特選、3名が入選するなど、生徒の意欲の高まりが感じられた。

- ・「焦点授業」のうち、もう1クラスは「教科等横断型授業」を行い、実社会や日常生活の課題をテーマに、異なる教科の複数の教員で横断的な授業を行う。

（実践事例）「数学Ⅰ」×「地学基礎」

地域の特徴的な石材である緑色片岩（通称青石）が、伊方町すべての地下に埋まっていると仮定し、既習の公式などを用いてその埋蔵量と価格を計算するという授業を行った。生徒たちは、数学の考え方を実生活の中に当てはめることにより数学を身近なものとして捉えとともに、地域の地形や地質に関心を持つきっかけとすることができていた。

- ・「焦点授業」の様子等は本校ホームページやFacebookを活用して、随時情報発信していく。
- ・生徒を対象としたアンケートを年2回実施して、授業の評価を行い、その結果を基に改善を行う。

○「総合的な探究の時間」及び学校設定科目「未咲輝（みさき）学」について

- ・月初めと月末に授業担当教職員及びコーディネーターによる打ち合わせを実施する。
- ・月初めの会では、1か月の活動スケジュールを確認し、月末の会では、進捗状況及び今後の活動方針の報告を行い、年間スケジュールにおける進捗状況等を確認する。
- ・必要に応じて、学校を代表して活動する「せんたん部」の生徒も交えた打ち合わせを行う。その際、「せんたん部」の生徒が各研究グループの進捗状況や要望事項等を報告することで、地域探究活動を「自分ごと」として捉え、自走性を高める機会とする。
- ・生徒が記入するチャレンジシート（地域探究活動において自らに必要な力を、各教科でどのように身に付けるかを記入するシート）による振り返りを基に評価及び改善を図る。

6 成果の普及のための仕組み

- 本校では、「総合的な探究の時間」の研究発表会を年に2回（中間発表会、成果発表会）実施している。中間発表会は、本校文化祭に合わせた研究成果ポスターの作成及び掲示、成果発表会はオンライン配信を含めた対面での発表である。また、公共施設を使用しての出前発表会やオンライン発表会などを積極的に行い、より多くの人に成果を普及できる発表会の在り方を研究していく。また、例年、生徒は各種シンポジウムやプレゼン発表会に参加させていただき、本校の取組を発表する機会を得ている。今後も、それらの発表会等への参加に加え、できるだけ多くの生徒が成果発表を行うことができる機会を作っていきたい。
- 地域探究活動の研究成果を普及するための工夫として、令和5年度から開催している高校生シンポジウム「今を創る、未来を変えるトライブ」の実施によるイベント形式の情報発信や、本校ホームページやFacebook等による即時性の高い画像・動画による情報発信などが挙げられる。これまでに本校が行ってきた様々な情報発信ツールの更に効果的な活用法などを研究していきたい。地元地域への情報発信は対面による方法を、他地域への情報発信はオンラインによる方法を中心に研究を進める。
- 地域の子どもたちは地域で育てるという共通認識の下、近隣の高等学校と高校生コンソーシアムを構築し、その成果を発表し合うなど地域内での横の連携の強化を図ることで、成果の普及に努めていきたい。

7 国の指定終了後の取組継続のための仕組み

- 持続的な取組について
 - ・平成27年度から実施している地域探究活動において、本校が培ってきたノウハウや、これまでに築いてきた外部人材とのつながりを基盤にしながら、本事業で新たに構築される支援体制を維持するために、校内研修を行うことで、持続可能な組織づくりを行う。
 - ・本校地域協働課員やコンソーシアム構成員等が中心となり、ノウハウや校内研修の内容、研修方法などを整理していく。外部人材とのつながりについては、本事業で立ち上げた「地域特別講師データベース」の継続的な運用により、引き継いでいくこととする。
 - ・全教職員が関わる中で研修を積み、全教職員が「自分ごと」として捉えることができるよう、意識改革を行う。
 - ・指定終了後のコーディネーターについては、県がコーディネーターの役割を担う教職員を配置する予定。

管理機関名：愛媛県教育委員会

令和4年度 新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

【愛媛県立三崎高等学校】社会共創科（令和6年度設置予定）

地域社会学科 ● 変化の激しい社会を生き抜くことができる人材の育成

- 地域探究活動を通じた「生きる力」の育成
- 教科横断的な学びによる「多面的に学び、考える力」の修得

● 地域社会とつながる人材の育成

- 他者と協働し、自走するブーメラン人材
- 新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」の醸成

● 地域社会を教育課程に位置付けたSTEAM教育・キャリア教育の推進

- データサイエンスやプログラミング教育を学び、RESASなどのビッグデータを活用
- 地元企業・自治体と連携したインターンシップや進路相談会などの実施
- 地域活性化につながる起業家育成プログラムの実施



これまでの7年間の地域探究活動の取組を基盤とした、先進的な「地域社会学科」を設置

オンリーワンのカリキュラムを開発 ● 地域との連携をさらに強化

地域社会に開かれた教育課程

- 3 年次「起業家育成」 ◆ 起業プランの作成 ◆ 研究成果発表会 ◆ 他校との連携活動

2 年次「地域課題の発見・解決」

- ◆ 課題別研究 ◆ 個別探究活動 ◆ 今を創る、未来を変えるトライブ

1 年次「地域理解」

- ◆ 地域見学 ◆ 地域拠点での交流 ◆ 異年齢者交流 ◆ みさこう仕事図鑑

教科横断的授業

充実した教科学習
(1～3年)総合的な探究の時間
(1～3年)特色ある
学校設定科目

地域文化と国語 (3年)

トライブ・ラーニング
(2・3年)

せんたんコミュニケーション学 (1～3年)

未咲輝学 (1～3年)

愛媛県立三崎高等学校

コーディネーター

- ・新カリキュラムの研究開発
- ・年間指導計画の作成
- ・地域と学校との連携の推進
- ・地域特別講師DBの運用
- ・県外生徒募集のサポート

地域特別講師
データベース

コンソーシアム

愛媛県教育委員会
(管理機関)

運営指導委員会

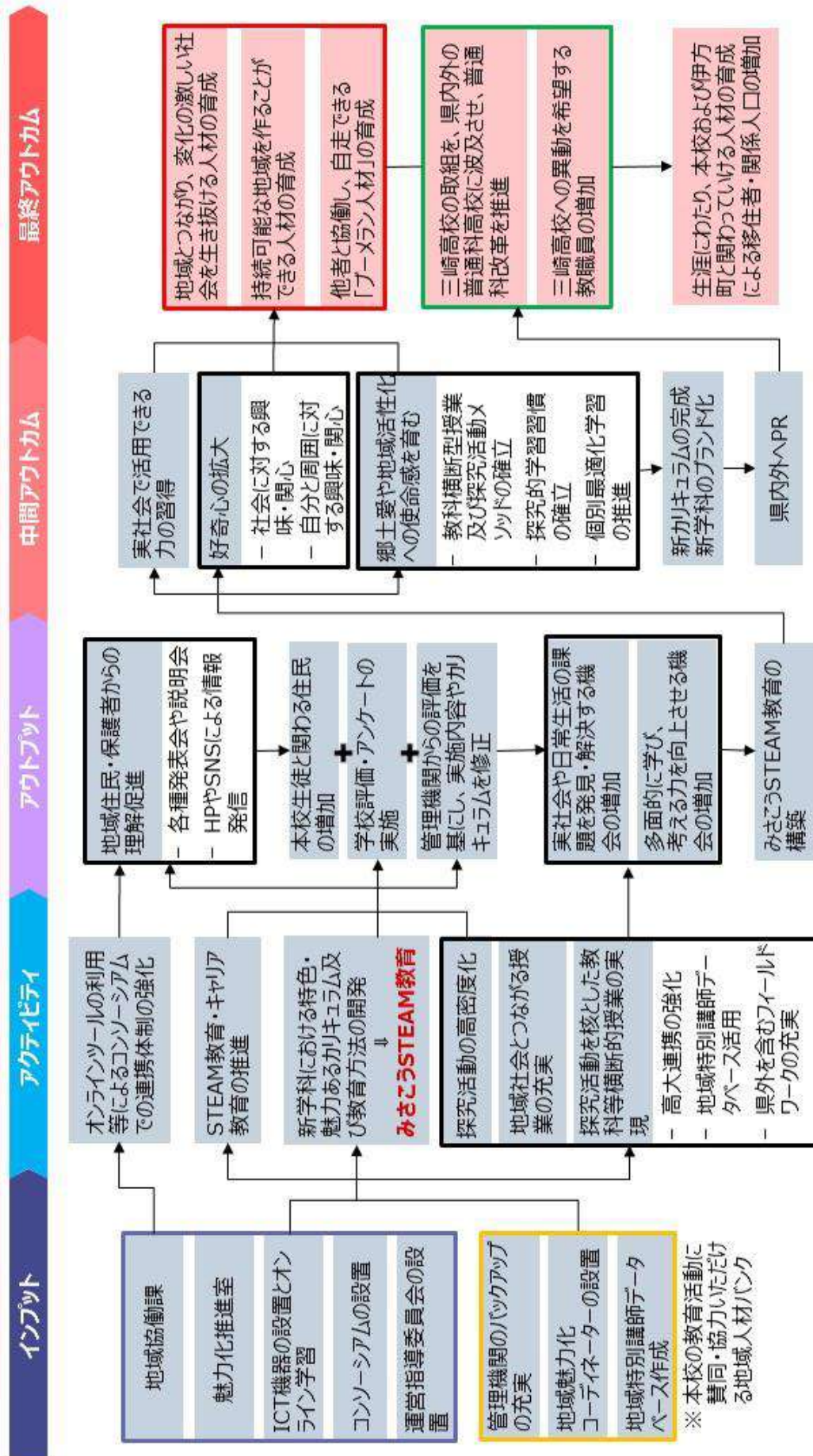
地域住民 NPO

大学生等

地域企業

別紙様式3

愛媛県立三崎高等学校 普通科改革支援事業ロジックモデル Ver.2



Ⅱ 組織の取組

1 普通科改革支援事業以前の取組

本校では、平成 27 年度に「土曜授業推進事業」の指定を受け、土曜日を年間 10 日開校日とし、教育活動を実施した。本校の伝統として、体育祭や文化祭をはじめとした学校行事への地域住民の参加率が高い。また、地方祭等の地域諸行事においても、本校の生徒がその担い手として参加するなど、地域との関わりが非常に強い。そこで、その計画段階において、教科指導だけでなく、地域活動を取り入れることにした。それまで、本校は担当課や部活動単位で、それぞれ地域活動に取り組んでおり、学校全体として取り組むような体系的なシステムが確立されていなかった。そのため、週に 1 時間の「総合的な学習の時間」に、学校全体として地域連携活動に取り組むよう、「総合的な学習の時間」に取り組む地域活性化事業を「三崎おこし」と名付け、カリキュラムの見直しを行った。1 年生「地域理解学習」、2 年生「地域活性化プランの作成」、3 年生「地域活性化プランの実践」とし、「総合的な学習の時間」に加え、開校日とした土曜日の 2 時間を使って年次進行で「三崎おこし」に取り組むこととした。また、研究グループごとに教員を配置することで、生徒・教職員ともに「学校全体で地域協働活動に取り組む」という意識が醸成された。

平成 28 年度には「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」、平成 29 年度には「コミュニティースクール推進校」、平成 30 年度には「地域を担う心豊かな高校生育成事業地域活性化プロジェクト」の指定を愛媛県教育委員会より受け、地域協働活動の研究に取り組んできた。4 年間の取組を通して、本校卒業生や地域住民、各種団体と連携して活動する機会が増加し、多くの人に本校の取組を知っていただくとともに、地域との協働による活動への協力体制を確立することができた。

さらに、平成 28 年度から本校は、「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中核事業として設立された「伊方町移住・定住促進協議会」の構成メンバーとして連携活動を行っている。具体的には、同協議会の会議への参加に加え、同事業の「次世代人材育成事業」として、伊方町、伊方町教育委員会に後援していただき、学校という枠を越えた町全体でのシンポジウムを開催したり、東京で行われた「特産品フェア」に本校生が帯同し、町の PR を行ったりするなど、地域を担う学校として伊方町と連携して多くの活動に参加してきた。

令和元年度から令和 3 年度においては、文部科学省から「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を受け、これまで、それぞれの場面での地域協働活動で育まれた学校と地域の結び付きを軸に、より組織的、継続的な取組を行っていくための組織である「コンソーシアム」を編成することにした。コンソーシアムは地域の人を中心に組織し、様々な立場、視点からの指導・助言を行ってもらうことで、本事業の効果的な実施を行っていくとともに、コンソーシアムメンバー同士の連携を深めることも目的とした。初年度は、8 団体にコンソーシアムに参加していただいたが、令和 3 年度には 12 団体に令和 4 年度からは 15 団体に参加していただいており、より多くの人に本校の活動に関わっていただくことができた。

上記のように、本校が本事業採択前より取り組んできた地域との協働活動において積み上げてきた経験や、そこから得られた学びは、生徒、教職員と校内全体のそれぞれの立場の間で共有され、地域や外部人材との連携を生み出してきた。

2 コンソーシアム

(1) 概要

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で構築された三崎高校のコンソーシアムは、同事業終了後も継続しており、令和4年度から、大正大学、株式会社 Prima Pinguino、伊予銀行の3団体に新たに加わっていた。

コンソーシアムでは、立案された計画や、実施状況に基づく助言等を踏まえて、プロジェクト全体に対する提案・支援等を行っており、多面的な立場から多くの助言をいただくことによって、教育活動の充実に結びついている。実際の活動における支援としては、事業実施中のプロジェクトに対する新たな視点からの提言や、その実現を可能にする外部人材の紹介・調整等が挙げられる。また、コンソーシアム関係者が各教科の授業や地域探究活動の講師を務めるなど、三崎高校の教育目標を共有した上で、豊かな学びの土壌を醸成することができるコンソーシアムを目指して活動した。

本年度は7月と2月の2回開催し、これまで築いてきた協力体制を再確認できた。また、本校の特色である地域とつながる地域連携授業や、地域を軸とした教科等横断型授業の推進のため、「総合的な探究の時間」や「未咲輝（みさき）学」を中心に学習活動にも積極的に参加していただいた。昨年度からは年に2回の会合に加え、オンラインを利用して定期的な情報共有を図ることで、スムーズな連携を行うことができ、学校外での活動では、地域行事やインターンシップなど、地域探究活動における生徒の受入れをコンソーシアム関係者に依頼した。

コンソーシアム参加団体一覧（順不同、敬称略）

所属	氏名	主な実績
大正大学	浦崎 太郎	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」企画評価会議 座長
株式会社 Prima Pinguino	藤岡 慎二	総務省地域力創造アドバイザー 産業能率大学経営学部 教授
株式会社伊予銀行	松岡 建夫	金融教育講演会講師
愛媛大学	笠松 浩樹	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」コンソーシアム構成団体
専修大学	大崎 恒次	
一般社団法人佐田岬Sプロジェクト	宇都宮 圭	
NPO法人さだみさき夢希会	田村 義孝	
NPO法人二名津わが家亭	増田 克仁	
佐田岬みつけ隊	黒川 信義	
伊方町役場総合政策課	宮本 廉	
伊方町教育委員会委事務局	矢野 喜久	
一般社団法人E.Cオーシャンズ	岩田 功次	
MIGACT	濱田 規史	
愛媛県教育委員会高校教育課	川本 昌宏	
公営塾未咲輝（みさき）塾	関本 岳朗	

(2) 第1回コンソーシアム

ア 期日 令和6年7月1日(月)

イ 参加者

大崎 恒次氏(専修大学)、笠松 浩樹氏(愛媛大学)、
宇都宮 圭氏(佐田岬Sプロジェクト)、
田村 義孝氏(さだみさき夢希会)、増田 克仁氏(二名津わが家亭)、
黒川 信義氏(佐田岬みつけ隊)、矢野 喜久氏(伊方町教育委員会事務局)、
岩田 功次氏(E.Cオーシャンズ)、跡見 愛美氏(Prima Pinguino)、
松岡 健夫氏(伊予銀行)、江口 大介氏(未咲輝塾)、
向 芹菜氏(未咲輝塾)、
野村 竜也主幹(県教委)、中村 紗喜子指導主事(県教委)、
中井 賢哉校長、松田 猛教頭、西村 浩則事務長、
津田 一幸教諭、河野 雄太教諭、
高岡 仁哉教諭(記録)、石本 冴氏(地域魅力化コーディネーター)

ウ 開会行事

エ 本事業の概要説明と生徒活動報告

(ア) 生徒募集について

(イ) 未咲輝ゼミについて

(ウ) トライブ・ラーニング、「今を創る、未来を変えるトライブ」について

(エ) 今後の取組について

オ 研究協議

(ア) 今後の生徒募集について

(イ) 「今を創る、未来を変えるトライブ」について

(ウ) その他

(3) 第2回コンソーシアム

ア 期日 令和7年2月18日(火)

イ 参加者

大崎 恒次氏(専修大学)、増見 和孝氏(伊方町役場総合政策課)、
濱田 規史氏(MIGACT代表)、藤岡 慎二氏(Prima Pinguino)、
宇都宮 圭氏(佐田岬Sプロジェクト)、田村 義孝氏(さだみさき夢希会)
増田 克仁氏(二名津わが家亭)、黒川 信義氏(佐田岬みつけ隊)、
藤原 光一氏(伊予銀行)、横山 理人氏(未咲輝塾)、
江口 大介氏(未咲輝塾)、
野村 竜也主幹(県教委)、中村 紗喜子指導主事(県教委)、
横山 理人(未咲輝塾)、江口大介(未咲輝塾)、
中井 賢哉校長、松田 猛教頭、西村 浩則事務長、
津田 一幸教諭、河野 雄太教諭、
越智 仁美講師(記録)、石本 冴氏(地域魅力化コーディネーター)

ウ 開会行事

エ 事業報告

(ア) 未咲輝ゼミについて

- (イ) 「今を創る、未来を変えるトライブ」について
- (ウ) 特色選抜入試について
- (エ) 生徒募集について
- (オ) トライブ・ラーニングについて
- (カ) 学校魅力化アンケート結果
- (キ) 今後の取組について

オ 研究協議

- (ア) 来年度からのコンソーシアムについて
- (イ) 外部との連携について（高大連携）
- (ウ) その他

3 管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について

(1) 職員体制に関する支援

- ア 小規模校で地域活性化活動に取り組むことを希望する優秀な教員の配置
- イ 本校出身の優秀な教職員の配置や、本校勤務年数が長い経験豊富な教員の配置

(2) 取組内容に関する支援

- ア 生徒のグローバルな視点の習得支援（海外留学等にいたる指導）
- イ 生徒のコミュニケーション能力の向上支援（県教育委員会による「えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予」の参加支援）
- ウ 伊方町による本校地域活性化に関する特別授業における講師謝礼、旅費の令達
- エ 一般社団法人佐田岬Sプロジェクトによる佐田岬灯台利活用プロジェクトにおける活動支援
- オ NPO法人さだみさき夢希会による「みっちゃん大福」の普及及び販売活動（特産品の開発）における活動支援
- カ 愛媛大学によるアントレプレナーシップ教育（課題解決カリキュラムの開発）における活動支援
- キ 専修大学による未咲輝ゼミ（放課後ゼミ）活動等における活動支援
- ク 佐田岬みつけ隊による歴史や文化を中心とした地域研究活動（地域資源活用プログラム）における活動支援
- ケ NPO法人二名津わが家亭による地域活動拠点の提供
- コ 株式会社伊予銀行による起業教育支援
- サ 一般社団法人佐田岬観光公社による地域資源活用プロジェクト推進支援

(3) 成果普及のための支援

- 「えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予」の開催（1月23日）発表校、パネルディスカッションパネリストとして参加
- ※愛媛県教育委員会が主催し、県内高校等が、指定を受けた各種事業の取組や、独自の研究実践について発表し、その成果を広く高校生・中学生にまで普及する「えひめスーパーハイスクールコンソーシアム」で、同校が発表及び意

見交換により成果を普及

(4) 運営に関する支援

ア 運営指導委員会の開催

年2回実施（7月1日、2月18日）

イ コンソーシアムの開催

年2回実施（7月1日、2月18日）

ウ 「えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予」の開催（1月23日）

Ⅲ 研究開発

1 事業の実績

(1) 事業の実施日程

事業項目	実施日程（回数）		
	令和4年度	令和5年度	令和6年度
コーディネーターの配置	8月1日		
運営指導委員会	9月20日、2月15日	7月3日、2月15日	7月1日、2月18日
コンソーシアム	9月20日、2月15日	7月3日、2月15日	7月1日、2月18日
オンライン・コンソーシアム	11月24、25、30日		
令和6年度教育課程委員会	5～2月（6回）	5～2月（7回）	
未咲輝学Ⅰ「地域理解」	7～3月（8回）	4～1月（7回）	5～2月（12回）
未咲輝学Ⅱ「RESAS」	6月～	6月～	5月～
未咲輝学Ⅲ「起業に向けて」	6月～	6月～	5月～
みさこう郷土芸能	9月～	5月～	5月～
エネルギー教育	9～2月（4回）	10月5日、1月30日	
Jobフェア in みさこう		9月8日	
インターンシップ		9月12～14日（1年）	6月17～19日（3年）
中学生1日体験入学	10月22日	10月14日	7月27日、11月23日
みさこうフェスティバル	9月23日	10月15日	9月22日
企業説明会	11月8日	11月8日	11月21日
林業教室		12月7日	10月24日
福祉教室		12月7日	
今を創る、未来を変えるトライブ		12月18、19日	12月12、13日
高校生SRサミット「FOCUS」	11月11～13日		
県外視察研修	2月2、3日（島根県）	1月20、21日（宮崎県）	1月25、26日（宮崎県）
地域教育実践南予ブロック集会		1月20日	
えひめスーパーハイスクールコンソーシアム	1月31日	1月25日	1月23日
日本農業遺産「愛媛・南予の柑橘農業システム」フォーラム		1月28日	1月25日
アウトソーシングワークショップ	2月21日		
未咲輝-SENTAN-発表会	2月15日	2月15日	1月24日

(2) 成果及び課題

ア コーディネーターの配置

令和4年8月1日から雇用。他県での教職経験や一般企業での海外勤務経験などの幅広い経験を生かし、校内外を問わず、新事業に係る校内諸行事の企画立案や外部人材との連絡・調整などを行っている。具体的には、令和6年度からの「総合的な探究の時間」や学校設定科目「未咲輝学」のアップデート、地域探究活動に関係する新しい学校設定科目の立案、地域特別講師データベースの構築、未咲輝ゼミの連絡・調整などを行っている。また、本校教員や生徒が共に、本校の魅力を全国の中学生に向けて発信をするなど、精力的に活動している。

令和4年度以降の勤務実績や教職員のコーディネーター研修への参加を通して、よりスム

ーズに連携を取ることができるようになり、学校設定科目の学習内容の検討や、「未咲輝ゼミ」の運営及び連絡・調整、新学科の設置の柱となる分野で力を発揮してもらうことができた。その一方で、業務内容が多岐にわたることが課題であった。今年度は、延べ4人の教職員がコーディネーター研修等に参加しており、来年度以降も校外研修等に積極的に参加したり、校内研修で全教職員の共通理解を図ったりして、コーディネーターを中心に教職員が一体となるよう、さらに連携を推進していきたい。

イ 運営指導委員会

令和6年度は2回開催し、特に「未咲輝ゼミ」の枠組み作りと事業の持続可能性について活発な意見交換がなされ、専門的見地から指導・助言、成果に関する評価をいただいた。本事業終了後も、運営指導委員と連絡を取り合うなどして、授業や行事における連携の在り方を模索したい。

ウ コンソーシアム

令和6年度は2回開催し、これまで築いてきた協力体制をより強固なものとした。コンソーシアム関係者には、「総合的な探究の時間」や「未咲輝学」、「未咲輝ゼミ」などの教育活動に、日頃から積極的に参画していただいている。本事業においては、本校の特色である地域とつながる地域連携授業や、地域を軸とした教科等横断型授業の推進のため、各教科の授業においても、コンソーシアム関係者に積極的に参加していただき、生徒・教職員ともに学びを深めることができた。また、学校外での活動では、地域行事やインターンシップなど、地域探究活動においてコンソーシアム関係者に生徒を受け入れていただいている。

本事業終了後も、コンソーシアム関係者とは協働体制を継続しつつも、会議の在り方や開催頻度について検討していきたい。

エ 校内教育課程検討会

社会共創科への改編前の普通科については、就職・専門学校への進学を主としたⅠ型と、四年制大学への進学を主としたⅡ型（文科系・理科系）の2類型3コース編成であったが、社会共創科については、地域探究、人文探究、科学探究の3コースに再編成した。生徒の興味・関心のある探究分野に合わせたコース選択となり、どのコースからも進学・就職が可能となっているため、生徒の学びに向かう力を高めることができると考えている。

それに併せて運営指導委員の方から助言をいただいたり、他県の先進的なカリキュラムを参考にしたりしながら、現在の週33単位から週29単位まで減らした教育課程とした。削減した時間に「未咲輝ゼミ」等において地域人材と協働して探究的な活動を行ったり、公営塾「未咲輝塾」との連携を一層深めたりするなどして、地域社会に根差した上で、より生徒一人一人の興味・関心に合わせた個別最適な取組を行っている。

また、来年度から「トライブ・ラーニング」や「せんたんコミュニケーション学」という新たな学校設定科目を本格的に実施することとなるが、探究活動や教科等横断的な授業を行うことで、変化の激しい社会を生き抜くことができる生徒を育てていきたい。

今年度は社会共創科の1年生と普通科の2、3年生が単位数の異なる教育課程で学習する予定だったが、学校行事の実施や委員会活動、課外活動等の時間の調整が課題となることが予想されたため、2、3年生の教育課程を見直し、30単位に変更してそれらの課題を解消した。

オ 中学生1日体験入学・みさこう茶屋（簡易体験入学）

中学生を対象にしたオープンスクールについては、今年度は中学生1日体験入学に74組が参加し、年間6回実施したみさこう茶屋に延べ32組の中学生が参加した。体験授業や在

校生との座談会、面談等を通して、本校と伊方町の魅力をアピールしたところ、学区外（愛媛県南予地域以外）の参加者を中心に多くの反響をいただいた。また、これらの行事には本校の生徒、特に社会共創科の1年生が積極的に関わっており、自分の学校をアピールする活動を通して、自己肯定感や郷土愛を育んでいる。

カ 令和6年度えひめスーパーハイスクールコンソーシアム

南予地区の先進的な取組を行っている学校の事例発表を聞いたり、パネルディスカッションに参加したりすることで、本校の取組について考えを深めることができた。また、他校の生徒との関わることで、今後の取組において新たな連携を取る際の参考となった。

今年度は1月に八幡浜市で行われ、社会共創科の1年生が本校を代表して発表を行うとともに、普通科の3年生がパネルディスカッションの代表生徒として参加した。会場からの鋭い質問にも適切に対応する生徒の様子に、これまでの取組の成果を感じることができた。

キ 未咲輝学Ⅰ「地域理解」

「佐田岬半島ミュージアム」の高嶋賢二氏と前田美和氏、地域活動団体である「佐田岬みつけ隊」の黒川信義氏を講師に招き、講義やフィールドワークなどを開催した。

1学期には佐田岬灯台や伊方町の各集落のフィールドワークを行った。地域内外に関わらず、社会共創科の新入生全員が町への愛着を持ち、「故郷」だと感じてもらえる契機となるよう、工夫して活動した。2学期には地域の伝統工芸品である裂織りの体験や名取地区の石垣の見学など、その地域の特徴にフォーカスを当てた内容の地域実習を行った。また、原子力発電所や風力発電用風車が立地している地域の特色を生かしたエネルギー教育、少子高齢化が進む地域の中で重要な役割を果たしている介護職への理解を深める福祉教室など、様々な切り口から地域理解活動を進めてきた。多くの地域人材、団体の協力を受け、専門的で充実した活動を行うことができた。その一方で、授業の時間調整や外部人材とのスケジュール管理に多くの時間が割かれることにもなった。今後は、コーディネーターをハブとした連絡体制を確立したり、それぞれの事業の振り返りを基に再度スケジュール調整を行ったりするなどして、負担軽減に努めたい。



ク 未咲輝学Ⅱ「RESAS」



ビッグデータを活用した地域経済分析システムである「RESAS」を活用した授業を行った。「株式会社STNet」の田口泰士氏を講師に招き、ビッグデータを活用した地域課題を発見し解決のための政策アイデアの立案を行った。田口氏による企業目線でのデータ分析に関する講義を通して、より実践的なデータ分析の手法、視点を学ぶことができた。今年度の9月には、実際に伊方町長に政策提言を行い、町長をはじめ、総合政策課長や佐田岬観光公社の方などから様々なアドバイス

をいただいて、政策アイデアをブラッシュアップした結果、「佐田岬」の表記に着目し知名度向上を図るアイデアが、内閣府地方創生推進室が主催する「地方創生☆政策アイデアコンテスト」において、四国1位となる「四国経済産業局長賞」を受賞し、さらに全国2位となる「優秀賞」に輝いた。「RESAS」を活用した授業は、地域経済の流れを主観的に捉えるのではなく、データを用いて実態を視覚的に情報収集、分析することで地域の姿を客観的に捉えることができるようになり、「総合的な探究の時間」等の探究活動を行う際にも効果的であった。

「未咲輝学」は、各学年団が担当しており、「RESAS」担当者も毎年変更になることが多い。そのため、担当者は年度当初に使用方法を前もって習得し、生徒への指導方法を考えなければならず、負担が大きいという課題が見られた。令和6年度は、それらの反省を踏まえて、年度当初に校内研修を行い、学年団が「RESAS」の使用方法を習得するとともに、外部人材の起用により担当者の負担を減らしつつ、効果的に生徒の活動をサポートすることができた。

ケ 未咲輝学Ⅲ「起業に向けて」

生徒一人一人がライフプランを作成し、そのライフプランを基に「仕事」や「働く」ということについて考えた上でビジネスプランを作成することで、実社会に即した学習となるように工夫した。今後も継続的に取り組んで、社会とつながる効果的な学習活動を行うことができるよう、関係団体と協働していきたい。そのためにも、コンソーシアム団体等の協力を得ながら、地域の起業家を中心として多くの人の話を聞くことのできる機会を増やすとともに、新たなネットワークを構築していきたい。

コ 県外視察研修

令和6年5月10日～13日に、生徒2名が3泊4日の日程で、One Young World Japan主催「長崎ピースプレナーフォーラム」に参加した。同フォーラムは、平和と起業家精神を融合させた新しい概念「ピースプレナー (Peace-preneur)」を育成することを目的とした国際フォーラムで、日本国内だけでなく、イランやウクライナなど紛争を経験した国々を含む約20カ国から約150人の若者が集った。本校生徒は、全国から選ばれた6人の高校生のうちの2人であり、多くの方々とのコミュニケーションを通じて学んだことを、本校に還元してくれた。

令和7年1月25日・26日に、生徒3名が2泊3日の日程で、宮崎県立飯野高等学校主催

「全国グローバルリーダーズ summit」に参加した。昨年度に引き続いて2度目の参加となったが、組織作りや情報発信の方法など様々な面で多くの学びを得ることができた。

サ みさこうフェスティバル

毎年恒例となっている本イベントでは、吹奏楽部の演奏のほかに「みさこう応援団」「みさこう体操 115」などの有志生徒が参加し、三崎小学校体育館で開催した。来場した地域住民をはじめ多くの方々から賞賛の言葉をいただくなど、生徒が自己肯定感を高め、学校と地域の距離がさらに近づく機会となった。

シ job フェア in みさこう

毎年2年生を対象に行う合同企業説明会「job フェア in みさこう」には、今年度も伊方町内の企業・社会人を中心に参加していただき、生徒たちがブースを回りながら企業の説明やその仕事を選んだ経緯・やりがいなどを聞くことで、仕事に対して新たな視点を持つことができた。今年度は、近隣の中学校も招待し、地域の企業理解、「ブーメラン人材」の育成につなげることができた。

ス みさこう郷土芸能

伊方町が抱える大きな課題の一つが、進学や就職を機に都市部へ転出する若者が多く、地域活動の担い手不足が深刻化しているということである。その問題は、地域のお祭り等で披露する伝統芸能の衰退という形で如実に現れるようになり、地域のお祭りの規模は年々縮小傾向にあった。そこで、地域の伝統を次世代に継承し、地域を活性化することを目的に始まったのが「みさこう郷土芸能」である。地域の方々と当時の三崎高校生を中心に29名の有志のメンバーが集まり、まずは三崎高校の文化祭で披露することを目標にしてスタートした。

伊方町を出身とする「地元生」と伊方町外の愛媛県内の市町村からやってきた「町外生」、そして、愛媛県外からやってきた「県外生」が、出身地の違いに関わりなく、伝統芸能の継承に本気で取り組んだ結果、地元出身の生徒には改めて自分の町に対する「誇り」が、そして、町外・県外出身の生徒には新しい故郷を持つ「喜び」が芽生えた。地域の伝統を継承する活動を通して、生徒たちは自己のアイデンティティを再認識し、新しい価値観や考え方を身に付けることができた。

その年の文化祭では、バックグラウンドの異なる生徒たちが、少子高齢化による人口減少や新型コロナウイルスに負けまいと、地域の伝統芸能を披露する姿に、涙を流した地域の方も多かった。文化祭での演技は大きな反響を呼び、各地域のお祭りでの出前演技、さらには県外のイベントへの出演など、その活動は佐田岬半島を越えて広がっている。そして、令和6年度に、他の模範となるような青少年活動を実施している団体として、愛媛県優良青少年団体知事表彰を受けた。



現在、みさこう郷土芸能には、全校生徒 155 名のうち 50 名が参加して積極的に活動を続けており、今年度の三崎地区の秋祭りには 5 名の生徒が地域からの大役を引き継ぎ、五ツ鹿のメンバーとして正式にお祭りに参加した。昼夜を問わず集落を練り歩き、舞を披露した 5 名のメンバーには「地元」や「県外」といった出身地の違いによる壁を越えた絆が生まれており、伊方町の子どもとして、町のために主体的に行動する姿が見られた。

セ みさこう郷土芸能～巫女部門・五ツ鹿部門～

令和 6 年度から、これまでのみさこう郷土芸能の活動がさらに発展し、五ツ鹿部門と巫女部門に分かれて精力的に活動を行った。五ツ鹿部門の生徒たちは、今年度の三崎地区の秋祭りに正式に参加し集落を練り歩き、舞を披露した。また、巫女部門の生徒たちは、三崎地区の祈年祭に参加し、合計 9 社奉納を行った。どちらも地域の方々からの非常に高い評価をいただいた。



ソ 「今を創る、未来を変えるトライブ」

新しい学校設定科目「トライブ・ラーニング」及び「せんたんコミュニケーション学」のキックオフとして設定したサミットであり、「地域資本を活用した学習によって、地域の価値を再認識し、地域とつながり、変化の激しい社会を生き抜くことができる人材を育成すること」をコンセプトに、参加生徒の「チームビルディング力」や「コンテキスト・シフティング力」の向上を目標にしている。

昨年度に引き続き、今年度は令和 6 年 12 月 12 日・13 日に開催し、愛媛県の北条高校、東温高校、今治南高校、高知県の清水高校、徳島県的那賀高校の計 6 校の生徒が参加した。また、愛媛大学教育学部の学生に各グループに加わっていただき、メンターとして、高校生のよき伴走者を務めていただいた。1 日目には学校の枠を越えてグループを編成し、地域ガイドの協力を得て、伊方町の 6 集落でフィールドワークを行った。各集落では、「えん」をテーマにそれぞれがポラロイド写真を撮影し、2 日目には写真の紹介とプレゼンテーションを行った。

今後も本フォーラムを継続して、他校連携・高大接続の先進的な取組としてアップデートをしていきたい。



タ 未咲輝ゼミ

放課後や休日に地域の方々を講師として迎え、生徒たちの興味・関心に応じた 10 のゼミ活動をスタートさせた。

	ゼミ名または内容	登録者数	合計			1 学期			2 学期			3 学期		
			開講回数	参加延	平均	開講回数	参加延	平均	開講回数	参加延	平均	開講回数	参加延	平均
1	地歴ゼミ	27人	46回	246人	5.3人	14回	80人	5.7人	20回	98人	4.9人	12回	68人	5.7人
2	Suports Conditioning (スポコン)	8人	3回	13人	4.3人	3回	13人	4.3人						
3	空き家よみがえらせ隊	11人	6回	45人	7.5人	3回	33人	11.0人	2回	8人	4.0人	1回	4人	4.0人
4	未咲輝precollege	4人	7回	11人	1.6人	3回	5人	1.7人	4回	6人	1.5人			
5	弾き語り	10人	27回	69人	2.6人	10回	39人	3.9人	13回	26人	2.0人	4回	4人	1.0人
6	お料理教室	11人	14回	87人	6.2人	4回	26人	6.5人	6回	38人	6.3人	4回	23人	5.8人
7	エネルギー問題を考えよう！	4人	16回	35人	2.2人	6回	17人	2.8人	9回	17人	1.9人	1回	1人	1.0人
8	Webで生きて行く	9人	8回	37人	4.6人	4回	26人	6.5人	3回	8人	2.7人	1回	3人	3.0人
9	Café to 燈人	20人	26回	317人	12.2人	10回	114人	11.4人	11回	144人	13.1人	5回	59人	11.8人
10	お金の流れる仕組みを知ろう！	2人	3回	5人	1.7人	2回	4人	2.0人	1回	1人	1.0人			
計		106人	156回	865人	5.5人	59回	357人	6.1人	69回	346人	5.0人	28回	162人	5.8人

(ア) 地歴ゼミ-佐田岬みつけ隊-

「佐田岬半島ミュージアム」の高嶋賢二氏と前田美和氏、「佐田岬みつけ隊」の黒川信義氏を講師に招き、平日は校内で座学を中心に活動を行い、土日に校外でのフィールドワークを実施した。地層、地質、岩石の観察や佐田岬半島の集落を巡り、その成り立ちや歴史、生活を知るなど、その活動は多岐に渡っている。さらに、「佐田岬みつけ隊」の活動にも参加して、ゼミで調査・作成した松森城のジオラマを発表しており、その活動について、毎日新聞に掲載していただいた。

(イ) Basic Medical Fitness&Personal Stretch

「伊方町地域おこし協力隊」の太木喜知氏を講師に招き、簡単な身体のほぐし方から痛みの取り方、バレーボール部を対象に「体幹トレーニング講座」等も実施した。生徒の要望に応じて、高齢者のための体操なども作成した。

(ウ) 空き家よみがえらせ隊

二名津わが家亭の増田克仁氏を講師に招き、伊方町の空き家調査や空き家を活用した地域活性化の方策を考案し、三崎・二名津地区を中心に空き家巡りを行い、最終的には空き家を生徒たちのニーズに合わせてリフォームすることを目標に活動を行った。

(エ) 未咲輝 precollege

専修大学の大崎恒次准教授のゼミ生とオンラインで交流し、探究活動への助言などのアドバイスを得ることができた。オンラインでの開催であったため、1回の参加生徒は2～3人程度であったが、その分個別に連携を深めることができた。来年度は「総合的な探究の時間」等にも関わっていただく予定であり、より深化した高大連携の形を目指して試行錯誤を続けていきたい。

(オ) 弾き語りゼミ

伊方町を中心に音楽活動をしている山崎真唯子氏を講師に迎え、歌や楽器演奏を楽しむことを目的として、年間を通して継続的に活動を行い、9月には伊方町ムーンビーチで行われたイベント「イロドリフェス」に出演したり、11月には本校の文化祭で弾き語り路上ライブを行ったりした。また、山崎氏が独自で行っている八幡浜市の音楽イベントにもゼミ生が自主的に出演し、伊方町を含む八西地域全体を盛り上げた。現在、ゼミ生は作曲活動も行っており、来年度からの新たな活動の展開に期待が持てる。

(カ) お料理ゼミ

伊方町で活動している高齢者サロン「あみだ会」の中村まゆみ氏を中心とした講師陣を迎え、料理の楽しさや栄養の基礎、佐田岬半島の郷土料理について学ぶことを目的に活動した。生徒の要望に即して、包丁の正しい握り方や魚の捌き方などを丁寧に教えていただき、これまでに「さつま汁」や「芋餅」などの郷土料理から「ピザ」や「マフィン」などの生徒のリクエストメニューまで、幅広いジャンルの料理を作った。

また、ムーンビーチや瀬戸リゾートなどの野外での活動も行い、1月には県内テレビ局のニュース番組で「昔ながらのおやつ特集」の一環として、ゼミの活動が報道された。

(キ) エネルギー問題を考えよう！

本校公営塾「未咲輝塾」の石口孝治氏を講師に招き、特に電力や福島第一原発に関することを取り上げ、エネルギーの有効的な活用方法について探究した。2学期には大洲市で開催された「科学体験フェスティバル」に参加した。

また、年間を通して、「太陽光を利用したピザづくり」の実現に向けて活動した。

(ク) WEBで生きて行く

有限会社ティムスの代表取締役である船山隆氏を講師に迎え、ホームページの制作・管理を通して、WEBに必要なスキルと知識を学ぶことを目的として活動を行った。ゼミ生一人一人が、プロフィールを掲載するホームページを作成することを目指して、意欲的に取り組んだ。

また、「総合的な探究の時間」においても、船山氏を講師に迎え、本校の魅力化ホームページを制作した。

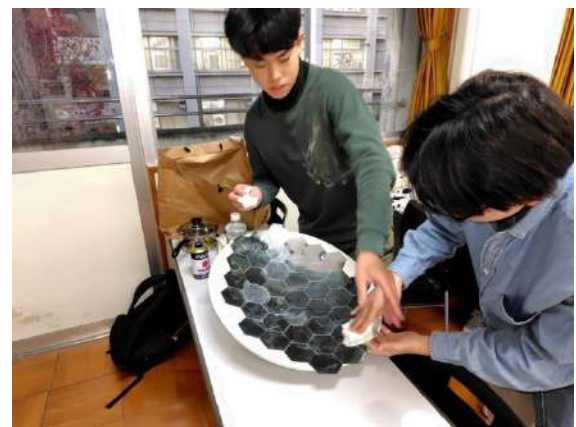
(ケ) Café to 燈人(あかりびと)

地元レストラン「まりーな亭」の店主であり、「佐田岬Sプロジェクト」の代表でもある宇都宮圭氏を講師に迎え、みさこう Café やブイアート、佐田岬灯台の利活用プロジェクトなど、多岐に渡る活動を行った。これまでに宇都宮氏とともにやってきた探究活動をアップデートし、未咲輝ゼミでは、より直接的に地域の課題を解決する内容となった。

9月には「イロドリフェス」にカフェを出店し、11月には灯台利活用プロジェクトの一環として、佐田岬灯台で「渚のエメラルドマルシェ」を実施した。これらのイベントについては、企画立案から当日の運営まで本ゼミの生徒が行い、町内外から多くの来場者を迎え、大盛況であった。

(コ) お金の流れる仕組みを知ろう！

伊予銀行の高村尚吾氏、長岡美佐氏を講師として、お金の流れやライフイベントにかかるお金などについて、オンラインでの講義を実施した。また、みずほ証券の清水大吾氏を特別講師として迎えた講話は、経済学部等を志望する生徒にとって、非常に重要な学びの機会となった。



チ 未咲輝-SENTAN-発表会

昨年度までは、伊方町役場大会議室で行っていた探究活動の成果発表会を、今年度は三崎高校で開校記念行事として実施した。オンラインで配信することで、多くの人に参観していただくことができ、本校の取組を多くの人に発信する機会となった。

これまでは「地域課題の発見・解決」を中心において探究活動を行ってきたが、生徒は探究活動に限らず、様々な活動を通して地域との結び付きが非常に強く、郷土愛が十分に醸成されている。そのため「地域課題の発見・解決」にとどまらず、その過程で得た知識や学びを、実社会や自分自身の興味・関心のある分野においてどう生かしていくのかということを中心とした探究活動を生徒が実施していけるよう、今後も探究活動の在り方や校内システムの見直しを行っていきたい。



2 みさこうSTEAM教育

(1) 学校設定科目「未咲輝学」

系統的かつ持続的な地域協働活動の取組を行っていくために、令和元年度に、3年間の系統的な授業を通して「ブーメラン人材」として必要な力を育成することを目標として、週に1時間、学年ごとにテーマを決めて探究活動を行う学校設定科目「未咲輝学」を開講した。本事業の指定を受け、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことのできる人材の育成、地域社会とつながる人材の育成を目指して、内容の見直しや外部人材との連携の強化を行った。

1年生は、「地域理解」をテーマに、地域の史跡・施設の見学及び調査・研究等や、エネルギー教育、SDGs学習、インターンシップ等を行った。地域の特色や地域資源をこれまで以上に有効活用するために、佐田岬半島ミュージアムや地域活動団体、四国電力などの外部団体と連携を深め、体系的に探究活動に取り組み、専門的な助言をしていただくことで、より

深く地域を理解することができた。また、地域資源を最大限に活用するには、実際に現地を訪れたり、見識のある人に話を聞いたりする必要がある。そのために十分な時間を確保し、生徒がより多くの体験をする機会を作ることが、教職員の重要な役割である。今年度は授業時間の確保に取り組み、その結果、各団体との調整等に係る時間が増加した。今後は、負担を減らしつつさらにスムーズに活動できるよう、再度実施内容を検討していきたい。

2年生は、「地域課題の発見・解決」をテーマに活動を行った。地域課題を経済的側面から考察するために、グループごとにテーマを設定して、経済産業省と内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）が提供している「RESAS」を用いて研究を進め、「地方創生☆政策アイデアコンテスト」に応募するプラン作りに取り組んだ。その後、他の場面での活動においても、生徒が自主的に、「RESAS」を活用して情報の収集や分析を行ったり、他分野でのデータサイエンスを活用した探究活動を行ったりするなど、ICT活用能力やデータサイエンス分野への関心の高まりを感じることができた。「未咲輝学」の授業は、それぞれの学年団の教職員が指導を行っているため、毎年担当者が変わることが多い。そのため、年度ごとに自ら「RESAS」の使い方を学び、生徒に指導する教員が必要となっており、それが担当者の負担増にもつながるという課題が見られた。今後は、特定の教職員に負担が集中するという課題を解消するために、校内の教職員研修を実施し、多くの教職員が「RESAS」を使用できるようにする必要があると強く感じた。

3年生は、ビジネスプランを作成した。その際、単にビジネスプランを作るのではなく、3年間の高校生活やこれまでの人生を振り返り、自己と対話する時間を多く取ることで、自己と社会とのつながりや関わり方について見つめ直す活動とした。「起業」だけに留まらず、多くの社会人や企業人と交流し、「仕事」に対する多様な視点や価値観を育成するために、より一層の外部人材との連携の必要性を感じた。

3年間の活動を通して、地域の職業人と連携することで地元企業への理解を深め、より地域に根差したキャリア教育を行っていききたい。そのためには、従来1年次の9月に固定していたインターンシップの時期を希望に合わせて変更したり、複数企業でのインターンシップを可能にしたりするなど、コンソーシアム構成員と協働して、柔軟な取組を検討したい。そうすることで、地域の魅力を発見し、地域にUターンする「ブーメラン人材」や、地域経済を支え地域の新たな雇用を創出する起業家の育成を目指していきたい。

来年度からは、本事業で培った地域探究の様々なノウハウやデータを、教材としてワークブックを作成し、運用していく予定である。



(2) みさこうSTEAM教育

令和5年度に、愛媛県教育委員会高校教育課職員による学校訪問研修において、全ての授業でSTEAMの観点を取り入れた授業を行った。

ア 実践事例1「数学Ⅰ」×「情報Ⅰ」

数学科（数学Ⅰ）学習指導案

						授業者								
学科			学年・組			日時			教室			使用教科書		
単 元		データの分析					内容のまとめ		データの分析					
単元の目標	(1) 各代表値の定義を理解する。 (2) 複数の種類のデータを散らばりや変量間の関係などに着目し、解決の過程や結果を批判的に考察できるようになる。 (3) 仮説検定の考え方を理解できるようになる。 (4) 複数の種類のデータを、データの分析の考え方を元に分析しようとする。	指 導 計 画	1	データの整理					1 時間					
				データの代表値					1 時間					
				データの散らばりと四分位数					3 時間					
				分散と代表値					3 時間					
単元の評価規準	知識・技能	① 箱ひげ図に必要な数値を求め、箱ひげ図を書くことができる。 ② 分散、標準偏差を計算で求めることができる。	1	データの代表値を用いてデータの散らばりを判断することができる。					1 時間					
				仮説検定の考え方を理解している。					2 時間					
				複数の種類のデータを、様々な考え方で分析しようとしている。					2 時間					
				何を 1 とするかによってデータの見た目が変化することに興味を持とうとしている。					1 時間 (本時)					
本時の指導														
主題（教材）		まとめの演習												
前時の課題		仮説検定の考え方												
本時の目標	データの見方には様々あることを理解する。													
評価規準	お互いのデータの分析方法が異なることに興味を持とうとしているか。（思・表・判、主体性）													
指導過程	学 習 活 動		時間	指導上の留意事項					評価方法、資料等					
	導入	令和 2 年度国税調査、就業状態等基本集計を、表計算ソフトを用いて分析することを理解する。	5						・ 生徒用タブレットPC ・ teams ・ Excel					
		1 生徒ごとに階級幅を変えヒストグラム、箱ひげ図を作る。	20	・ 生徒ごとに階級幅を指示する。 ・ Excel での作業の手間がかかるため随時生徒のフォローを行う。					・ 生徒用タブレット 【評価方法（主体性）】 ・ 積極的にヒストグラム、箱ひげ図を作ろうとしているか。 【評価方法（思・判・表）】 ・ 発表内容及び発言					
		2 自分で作ったヒストグラム、箱ひげ図から分かることを考える。	10											
		3 互いのヒストグラム、箱ひげ図や分かることを比較し異なる点を考える。	5											
	展開	4 なぜ相違点が生まれるのかを考える	5	・ 階級幅が異なることで具体的にどんなことが起こるのか考えさせる。					【評価方法（思・判・表、主）】 ・ 発表内容及び発言					
統計データの見せ方により分かることが異なることを理解する。		5	・ データの見せ方により騙されないよう気を付けるよう伝える。											
備考														

情報科（情報Ⅰ）学習指導案

授業者

学科	学年・組	日時	教室	使用教科書
----	------	----	----	-------

単元	データの分析(3)	内容のまとめ	データの分析
単元の目標	(1) 各種データを分析する際に、コンピュータを使用し、その基本的なデータの形式について理解する。 (2) 各データの関係性を認識し、表計算ソフトを利用して計算した各代表値を分析の際に正しく活用し、分析する。 (3) 情報を収集する際にオープンデータなど信頼性の高いデータを活用する。	指 導 計 画 第4編 「情報通信ネットワークとデータの活用」 第3章 データの分析 48 さまざまなデータ 1時間 49 データの分析(1) 2時間 50 データの分析(2) 2時間 51 データの分析(3) 3時間 (本時はその2時間目)	
単元の評価規準	知識・技能 ① 2変量の相関を表した散布図の特徴を捉え、相関係数を予想することができる。 ② 相関関係を見て正負の相関を理解している。 ③ データの代表値等、様々な値をExcelで計算できる。 思考・判断・表現 ① 相関係数を見て、その相関関係について考察する。 ② 相関係数の値以外でわかることを考え、考察する。 主体的に学習に取り組む態度 ① 積極的に考察に取り組み、結論に向けて他と協力することができる。 ② 疑似相関の原因となる情報を積極的に収集している。		

本時の指導

主題（教材）	データの分析において冷静に判断する能力を身に付ける。			
前時の課題	散布図と相関係数について正しく理解する。			
本時の目標	2変量のデータに関して散布図や相関係数を求め、相関関係について理解させる。また、データの相関係数から2変量に因果関係が本当に存在するのか考えさせ、疑似相関の概念について学習させる。			
評価規準	数学や情報Ⅰの授業で得た知識をもとに2変量の関係性について考察し、他の生徒と積極的に意見を交換し、意見をまとめることができる。（思考・判断・表現）			
指導過程	学 習 活 動	時間	指導上の留意事項	評価方法、資料等
	導入 本時の目標を確認する。	5	・ 本時の目標を確認し積極的に取り組ませる。	
	展開 1 「チョコレートの消費量とノーベル賞受賞者数」のデータを見て相関係数を計算する。	15	・ データを調べることになった経緯について説明し、背景を理解させる。 ・ データの散布図から推測した数値を利用してExcelで相関係数を計算させる。	・ 演習プリント 【評価方法（知・技）】
	2 相関係数と散布図から2変数の相関関係について検証する。	20	・ データの相関について検証し、グループで意見を出させる。 ・ 2変数に因果関係があるかどうかについて意見交換させる。	・ 演習プリント 【評価方法（思・判・表）】 ・ グループ活動での様子 【評価方法（主）】
整理	次時の課題を提示し、本時の目標について振り返る。	10	・ 本時の学習を通して得た経験を通して、他のデータについて検証する姿勢を身に付けさせる。	・ 演習プリント
備考				

イ 実践事例2「公共」×「ホームルーム活動（人権教育）」

公 民 科 （ 公 共 ） 学 習 指 導 案

授業者

学科	学年・組	日時	教室	使用教科書
----	------	----	----	-------

単元	法的な主体となる私たち	内容のまとめ	自立した主体としてよりよい社会の形成に参画する私たち
単元の目標	(1) 私たちが生きる社会には、様々なルールや社会規範があることを理解させる。 (2) 法と道徳・慣習との共通点と相違点を学び、法は変更する仕組みを備えていることを理解させる。また、法は個人の権利尊重と社会秩序の維持という役割をもち、時代や状況の変化に対応してよりよいものにしていくことについて認識させる。	指導計画	1 法や規範の意義と役割 4時間 (本時はその3時間目) 2 契約と消費者の権利・責任 2時間 3 司法参加の意義 1時間
単元の評価規準	知識・技能 ① 個人の権利を尊重し、社会秩序を維持するためのルールや社会規範などについて理解できる。 ② 契約のあり方や消費者主権の考え方について、理解できる。 思考・判断・表現 法は国家による強制力をもつことを理解し、民主主義国家では選挙によって選ばれた代表で構成される議会で決定することや、公平で平等なルールを作るために主権者が努力し続けることの意義について考察できる。 主体的に学習に取り組む態度 18歳で成年になる意義をふまえて、契約の意味や責任を負うことについて学び、自分にとって必要な契約かを慎重に考えることができる。		

本時の指導

主題（教材）	自由・平等と法・規範			
前時の課題	教科書 p. 50～53 を読み、本時の学習プリントを作成しておく			
本時の目標	すべての人が固有の存在意義を有するかけがえのない人格として平等であることを理解し、認識させる。			
評価規準	現実の社会にある差別的事例に対して、憲法の知識を使って適切に批判し、解決策を提示できる。（思考・判断・表現）			
指導過程	学 習 活 動	時間	指導上の留意事項	評価の方法・資料等
	導入 ヘイトスピーチ解消法の主なポイントを読み、言論・表現の自由との兼ね合いを考える。	10	・朝鮮学校への授業妨害行為に対して裁判で損害賠償が命じられたことについても簡潔に説明する。	・ヘイトスピーチに争点をあてた法務省作成の啓発ポスター（教科書 p. 50）
	1 道徳・宗教と法との違いを認識する。	5	・戦前の日本における宗教弾圧の一例を紹介する程度にとどめ、深入りしない。	【評価方法（思・判・表）】 ・学習プリントの内容 ・観察
	2 憲法における自由権の規定をグループでまとめる。	8	・精神的自由、経済的自由にはどのような内容があるか理解させる。	【評価方法（思・判・表）】 ・グループで協力してまとめる
	3 憲法で禁止される差別の意味を理解し、現実の差別の事例を認識する。	12	・身近な差別の事例を考えさせ、発表させる。	【評価方法（主体的）】 ・自分の考えを整理し、発表する
展 開	4 家族に対する差別や性的少数者に対する差別について判例を読んで認識する。	5	・ライフスタイルの変化について触れ、生活の中でどうすればお互いを平等に扱っていけるようになるか考えさせる。	
	まとめ すべての人の自由と平等を守るためにどうすべきかを考える。	10	・数人の生徒に意見を発表させる。	【評価方法（主体的）】 ・自分の考えを整理し、発表する
備考				

ホー ム ル ーム 活 動 指 導 案				
日 時				
学 級			指導者	
主 題	自分の周りに目を向けよう			
主題設定の理由	入学して半年が経ち、様々な活動や行事を通して多くの人と関わってきた。他人との価値観や養育環境の違いにより生じる考え方の違いをどのように受け止め、理解した上で他人と接することができるかを考えさせる。			
本時の目標	① 自分の良さと他人の良さとはどう異なるのかを考えさせる。 ② 自分や他者が持っている価値観をそれぞれ理解させる。			
事前の準備・指導	世の中にはどのような差別があるかを考察させる。			
活 動 の 過 程 と 内 容		時間	指 導 上 の 留 意 点	機 器 ・ 資 料
活 動 の 開 始	知っている差別について共有する。	5	- どのような差別があるかを互いに共有させる。 - 人間の輪 P, 22～P, 41 に書いてある差別を確認させる。	・ プリント
活 動 の 展 開	1 過去にあった冤罪事件から、差別意識が招く問題点について考える。	15	差別意識を持つことにより、偏見や思い込みが生じる可能性があることを理解させる。	・ 人間の輪
	2 自分が気付いていない部分で差別が起こっていたり、人を傷つけていたりしていないかを考える。	15	- 自身の言動を客観的に考えさせる。 - 受け止める側の気持ちに立って考えるよう注意させる。	
	3 認識や考え方の違いから起こる差別を防ぐには何が大切か考える。	10	出た意見を否定しないよう注意させる。	
活 動 の ま と め	本時のまとめと次時の予告をする。	5	受容の精神が重要となることを考えさせる。	
評価の観 点	1 人権とは何かを授業全体を通して考えているか。 2 偏見や思い込みの危険性について思考できているか。			
備考				

ウ 実践事例3「古典探究」×「地学基礎」

国語科（古典探究）× 理科（地学基礎） 学 習 指 導 案

授業者

学科	学年・組	日時	教室	使用教科書
----	------	----	----	-------

単元	地震と火山	内容のまとめ	地球の構成と運動
単元の目標	(1) 口語訳を通して、温泉の神秘性について考察を行う。 (2) 火山活動と温泉についての関連性について、プレートの運動と関連付けながら理解させ、愛媛県の温泉が湧く仕組みや成分などについて科学的に考察を行う。	1 地球の構造 5時間 2 プレートの運動 5時間 3 地震と火山 4時間 (本時はその2時間目)	
単元の評価規準	知識・技能 ① 火山や断層についての基礎的な知識を習得できている。 ② 口語訳を適切に行えている。 思考・判断・表現 ① これまで学んだ知識を組み合わせ、考察を行うことができている。 ② グループ内で自分の意見を積極的に表現することができている。 主体的に学習に取り組む態度 ① 学習に自主的に取り組もうとしている。 ② グループの話し合いに積極的に参加し、意見を出している。		

本時の指導

主題（教材）		火山活動			
前時の課題		地震の活動			
本時の目標	伊予の温泉の起こりについて、古典および科学の視点から考え、理解する。				
評価規準	伊予の温泉の起こりについて、複数教科の視点から考え、表現できている。（思考・判断・表現）				
指導過程	学 習 活 動		時間	指導上の留意事項	評価の方法・資料等
	導入	本時の目標を確認する。	10	・複数教科の視点から愛媛県の温泉について考えることを伝える。 ・本時の目標を確認し意欲的に取り組ませる。	
	展開	1 「伊予の温泉の起こり」の訳を行う。	50	・生徒同士でアドバイスし合う。 ・打ち返したい方向に体重移動するように意識させる。	【評価方法（思・判・表）】 ・配布プリントの考察内容 ・話し合いへの参加度、内容
		2 愛媛県の温泉が湧く理由について科学的に考える。 （１）考察を行う。	7	・これまでの知識を用いて温泉が湧く理由について考えさせる。	
		（２）考えたことをグループで話し合う。 （３）話し合いの内容を発表する。	10 13	・話し合った内容を記入させ、他グループと共有させる。	
整理	本時の目標を振り返り、まとめを行う。	10	・本時の振り返りをワークシートに記入させ、次時の課題を確認させる。	【評価方法（思・判・表）】 ・授業シートの内容	
備考					

家庭科（フードデザイン）×保健体育（保健）学習指導案

授業者	
-----	--

46

オ 実践事例5 「生物探究」×「芸術（音楽Ⅲ・美術Ⅲ）」×「電子商取引」

理科（生物探究）× 芸術科（音楽Ⅲ）・（美術Ⅲ） × 商業科（電子商取引） 学 習 指 導 案					
理 科チーム目標：『三崎の海の現状から問いを見出し、科学的に探究する能力の育成』 芸術科チーム目標：『自分の考えや思いを相手に伝える豊かな表現力の育成』 商業科チーム目標：『CMに関する基本的な知識・理解をもとに、目的に応じた適切な媒体や表現方法を選択し、分かりやすい情報発信技術を身につける。』					
日 時			指 導 者		
学 級			教 室		
単 元	三崎の海を守ろう～私たちのメッセージ～		教 科 書	Joy of Music(教育芸術者) 美術3(光村) 電子商取引新訂版(実教出版) 探究(愛媛理科部会)	
指導目標	三崎の海の調査研究を基に問題解決に向けた学習プロセスを通して、思考力や判断力、表現力を育む。 SDGsの観点から、主体的に地域の自然や人と触れ合うことで地域社会の一員としての自覚を養い、課題解決の意識を高める。		指導計画	1 三崎の海の現状を調べる・・・5時間 2 三崎の海の現状や課題をまとめる・・・1時間 3 課題解決のための探求活動・・・6時間 4 発表準備及び成果発表会・・・3時間 (本時はその2・3時間目)	
本時の主題		成果発表会でみんなの意見を共有しよう			
目標	① 自分の考えや思いを相手に伝えるために、用具や表現方法を工夫して発表する。 ② 共通の課題について、多角的な視点で捉え新しい視点や解決方法を見出す。				
指導過程	学習活動(学習形態)		時間	指導上の留意点	資料・教具等
	導入	これまでの学習内容を振り返る。	10	・イボニシの調査結果やこれまでの各班の活動を振り返る。	・プロジェクタ
	展開	1 本時の目標と学習の手順を確認する。	5	・目標や手順を明示し、計画的に授業に取り組ませる。	・タブレット端末 ・ワークシート ・タブレット端末
		2 成果発表会に向けて準備をする。	35	・発表内容が相手に十分に伝わるよう、言語表現、使用媒体・情報のデザインなどを工夫させる。	・タブレット端末
	過 開	課題解決に向けて様々な情報を活用し、班員で協力して具体的なアイデアをまとめることができるか。			
		3 成果発表会を行う。	35	・生徒の疑問や意見に寄り添い共感した上で、より質の高い学びにつながるよう、各教科の指導者が専門的な知識や経験を活かして助言する。	・学習プリント
	程	自分たちの成果を相手にわかりやすく発表したり、他の人の発表についても興味を持って聴いたりできるか。			
		4 意見交換を行う。	10	・他の班の発表から新たに気づかせたり発想を広げさせたりすることで、多様な視点や立場があることを理解させる。	・学習プリント
整理	本時の学びを振り返る。		5	・授業の感想を発表させる。	・ワークシート
評価の規準等	【規準】課題解決に向けて主体的に考え、クラスメイトと意見共有や協力をして相手に伝わる成果発表ができたか。 ＜思考・判断・表現＞ 【方法】ワークシートによる個人の振り返りによる				
備考					

カ 実践事例6 「古典B」×「コミュニケーション英語Ⅲ」

国語科・外国語科（ 古典B×コミュニケーション英語Ⅲ ）学習指導案

日 時					指導者	
学 級			教 室			
単 元		和歌			教科書	MAINSTREAM English CommunicationⅢ (増進堂) 高等学校改訂版 標準古典B (第一学習社)
指導 目標	1	日本の伝統的な文化である百人一首を様々な視点で読解することにより、和歌の奥深さや面白さを理解させる。			指導 計画	1 万葉集……………2時間
	2	ICT 機器を適切に使用させる。				2 古今和歌集……………2時間
	3	グループでの言語活動に積極的に取り組ませる。				3 新古今和歌集……………3時間 (本時はその2、3時間目)
主 題		百人一首を STEAM 詠み！				
前時の課題		該当の和歌を短歌的、英語的、アートの、サイエンス的な観点で詠んでくる。				
本時の目標		1 百人一首を様々な視点で読解することにより、和歌の奥深さや面白さを理解させる。 2 既知の語句や表現を用いて自分の意見を英語で表現させる。 3 グループでの言語活動に積極的に取り組ませる。				
本 時 の 展 開 指 導 過 程	学 習 活 動		時間 (分)	指 導 上 の 留 意 点		評価の観点・評価活動・資料等
	導 入	1 導入/Greeting	10	・本時の目標を確認する。		
		2 Warm-up Activity	10	・日本の和歌と英語の poem との違いを意識させる。		
	展 開	1 百人一首 STEAM 詠み (1) 短歌チーム (2) 英語チーム (3) アートチーム (4) サイエンスチーム	40	・それぞれのチームの視点の違いを意識させる。 ・各教科の既習内容を使って説明するよう促す。		・タブレットPC 【評価規準】 ○和歌の内容を理解した上で、適切に口語訳ができている。 (思考・判断・表現) 【評価方法】 ○ワークシート
		2 百人一首 STEAM 探究 (1) 優秀作品の選出 (2) 想いの共有	30	・チームで積極的に言語活動を行うよう促す。 ・和歌に込められた作者の心情や情景を改めて考えさせる。		【評価規準】 ○既知の語句や表現を用いて自分の意見を英語で話している。 (外国語表現の能力) 【評価方法】 ○活動の観察 ○ワークシート
整 理	まとめ/Closing		10	・次時の活動内容を知らせる。		
備 考						

(3) 県外視察研修（宮崎県）

ア 目的

「グローバル」な視点で活動する高校生、大学生、高校教諭、行政職員、民間企業、NPOなど様々なカテゴリーの方が一堂に会し越境的な学び合いの場をつくる機会とする。そして、参加者全体で未来へつなぐ次代に向けた新たなチャレンジを創出することを目的とする。

イ 期間

令和7年1月24日（金）～1月26日（日） 2泊3日

ウ 研修先

1月25日	・真幸地区コミュニティセンター ・京町温泉郷 ・A g r i t e l O B E N O (旧えびの市立加久藤小学校おべの分校)
1月26日	・宮崎県立飯野高等学校



エ サミットの内容

(ア) 班別フィールドワーク



フィールドワークのテーマである「地域おこしについて知る」に基づき、えびの市とそれぞれの生徒の地元との共通点や相違点を見つけることを目的として実施した。フィールドワークではえびの市内の各所を視察し、地域おこしに尽力する方々へのインタビューを行

った。地域おこしの最前線にいる方々から熱のこもった話を聞き、地域活性化の重要性を学ぶことができた。温泉街ならではの温泉マップやバス停をモチーフにした温泉看板があり、その地域を象徴するものを様々な形でアピールすることの大切さを学んだ。また、空き家が非常に多いことが課題であるという共通点や、えびの市には空き地が多いが、伊方町は自然のままの広大な土地があるという相違点にも気付くことができた。

(イ) 探究活動



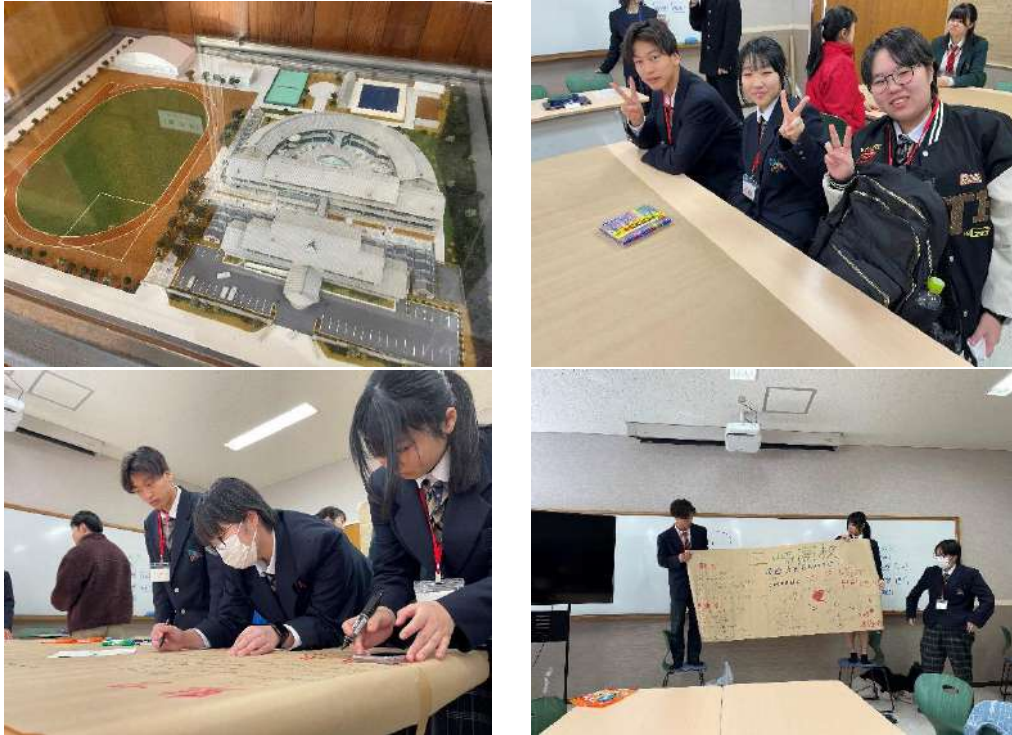
探究活動では、フィールドワークで発見したえびの市とそれぞれの生徒の地元との共通点や相違点を基に、えびの市の課題を考え、解決のためのアクションプランを提案した。人の意見に耳を傾け、どの意見に対しても共感することを意識しながら、話し合うことができていた。自分の考えを言語化し、他の方々と共有することで、新たな価値観に気付くことができた。

(ウ) 交流会



廃校となった旧えびの市立加久藤小学校おべの分校の校舎を活用した農泊施設「A g r i t e l O B E N O」にて、交流会を行い、1日目の振り返りやスポーツ体験、夕食会などを通して生徒同士の親睦を深めた。

(エ) 未来カフェ



学校ごとに、1日目の探究活動を踏まえて地元の課題を解決するためのアクションプランを考えた。えびの市と地元との共通点・相違点を基に課題の本質を捉えつつ、伊方町を盛り上げるためには高校生として何ができるのかを真剣に考えることができた。全国の高校生が集まり、それぞれの地域の現状を共有する活動を通して、三崎高校のよさを再認識するとともに、新たな魅力を発見することもできた。

オ 生徒の感想

○ 藤田 永遠（愛媛県立三崎高等学校2年 西条市出身）

私は、自分の意見を前にいる人にしっかり伝えられるようになるという目標を持って、全国GLS（全国グローバルリーダーズサミット）に参加しました。

1日目はフィールドワークのために4人班になりましたが、初対面のため緊張をしていました。しかし、飯野高校生が温かく声をかけてくれ、自分からも声をかけることができ、仲良くなることができました。フィールドワークに出かけると、すれ違う地域の人たちみんなが挨拶を返してくれてすごいなと思いました。地域の人にお話をうかがった際にも地域愛をたくさん感じたり、高校生など次の世代のために動いていたりして、驚きました。その中でも一番印象に残っている言葉が「（自分のプロジェクトは）自分が作ったドラマで、主役で、監督だ」という言葉です。自分はこうしていきたいということをはっきりさせ、相手を魅了して踏み出す勇気を持つことが大切だということを教えていただきました。その方は、えびの市のまちづくりの推進をしている「KRAP」という法人の代表者です。「KRAP」は地域おこしのために、えびの京町地区河川公園のキャンプ場などを作る提案を国に直談判し、実際に1億円以上の予算を出してもらいました。私も未咲輝ゼミの「Café to 燈人」の活動で公園プロジェクトを町にプレゼンしたことがあります。しかし、資材の高騰などにより予算が高くなり一部しか叶いませんでした。民間団体が国に直談判し、予算を出してもらった事例がない中で「KRAP」が提案を実現させたことから、熱い思いで向き合うことが重要だと分かりました。また、飯野高校生は、どこへ行っても顔見知りの地域の方ばかりで、普段から三崎高校よりたくさんの地域と関わる活動を

しているので、いいなと思いました。フィールドワーク後には、学んだことを生かして、えびの市の課題解決のためのアクションプランをグループで考え、模造紙にまとめ発表しました。思ったことを言葉でまとめるのが苦手な私にとっては難しかったですが、できる限り聞いてくれる人の顔を見ながら話そうと思い、実践することができました。夕方には生徒だけで交流する時間があり、初対面の人たちとバレーボールのチームを組み、声をかけ合いながらプレーすることができました。その後には、宮崎ならではの「かつぼ飯（竹で炊いたご飯）」などたくさんの料理でもてなしてもらいました。食後には、みんなで焚火を囲んでマシュマロを焼いたり、花火を見たりして楽しむことができました。

2日目は飯野高校に行き、校内を案内してもらいました。吹き抜け式になっていたりと、螺旋階段があったりと、三崎高校にはないものが多くて楽しかったです。その後には、三崎高校生3人で地元の課題解決のためのアクションプランを考えました。九州へ渡るフェリーがあることから、三崎が通過点となってしまっていることに着目し、まずはえびの市との共通点や三崎のよいところについて意見を出し合った結果、「釣り」を活用するという方向性が決まりました。アクションプランを模造紙にまとめ、みんなの前で発表しました。しかし、言葉がうまくまとまらず、内容が分かりづらくなってしまったので、事前に言いたいことを紙にまとめるなどするべきだったと反省しました。この研修には全国各地から高校生が集まっており、えびの市と地元との共通点を見つけ、それらを共有することで、こんな考え方もあるのだと新しい発見があり、とても勉強になりました。

この2日間が始まるまでは、不安が大きかったですが、始まってみると2日間はあっという間で、自分から動かないと何も起こらないので、自分から声をかけたり、自分の意見を発言したりして頑張ることができました。すると、いつもの自分では気付かないものにも目を向けることができました。飯野高校生から学ぶことが多く、同じ年代の高校生だと思えないほど立派に見えました。もし、逆の立場ならあのようにできなかったらうなと思い、自分はまだまだと感じ、移動の際や帰り道には「これはできた」「もっとこうすればよかった」と反省しました。参加する前の私は、人前で発言して思いを伝えることはできませんでしたが、この2日間でたくさん学ぶことができ、チャレンジしたことがよい経験になりました。勇気を出して参加してよかったです。この経験をこれからも生かしていきたいです。



○ 中村 吏騎（愛媛県立三崎高等学校2年 伊方町出身）

宮崎県飯野市の公民館で、1日目の予定を教えてもらった後、「猛獣狩り」、「ジェスチャー伝言ゲーム」通して、自己紹介を行い、すぐにいろいろな人と話して、仲良くなることができました。そのゲームで負けた人は、2日間の意気込みをみんなの前で発表しました。その後は、決められた班に分かれて今回の班別研修の話し合いや、自己紹介などをしました。僕の班は3人グループで、自分以外の2人が女性だったのでより緊張しました。しかし、話し始めると意外に話がはずみ、班別研修にスムーズに入ることができました。班別行動では班ごとに2つのスポットに向かい、そこにいる人に地域についてインタビューをしました。えびの市の町をこの日初めて出会った人と歩き、地域の方々と話すのは緊張しましたが、とても楽しく、たくさんの学びがありました。フィールドワーク後には、班ごとに昼食をとりながらこの町の課題とそれに対するアクションプランを考えました。みんなで考えたアクションプランを発表するのは難しかったですが、とてもよい体験ができました。すべての班が異なる場所に行っているため、班ごとにユニークなアクションプランが出ており、どれも三崎高校に戻って実際にやってみたいと思えるものでした。その日の夕方には、えびの市にある廃校を活用した施設でみんなと交流しました。バレーボールを通して、初対面の人たちと声を掛け合い連携することは、とても難しかったですが、仲を深めることができました。

2日目には飯野高校に行き、生徒に校内を案内してもらいました。三崎高校とは全く造りが異なっており、歩いていて興味が湧きました。校内見学後には、学校ごとに分かれ、えびの市と自分たちの地元の共通点・相違点を考え、アクションプランを考えました。他の地域との比較をする経験はあまりなかったので、非常に新鮮でした。

この2日間で、自分からコミュニケーションを取り、アイデアを出し、みんなでまとめることができたので、出発前に掲げていた目標を達成できたと思います。とてもよい仲間たちもでき、充実した2日間になりました。



○ 中野 愛唯（愛媛県立三崎高等学校2年 八幡浜市出身）

全国GLSに参加して私が一番に感じたのは、自分自身の課題の大きさです。特に課題を痛感したのは1日目のフィールドワークです。フィールドワークは、それぞれ決められた班で地域に深い関わりのある方に直接会って話を聞くというものでした。自分から気になったことを聞いたり、伊方町とその地域のことを関連付けたりして積極的に対話はできたものの、移動中での班員との交流がなかなかできなかったことが大きな悔いとして残っています。班員は3人で、私以外の2人は宮崎県内の学校の生徒でした。宮崎の話などで盛り上がっている中、上手く自分から話に加わることができず、2人の先生も同行してくれましたが、共通の話題で少し盛り上がったくらいで上手く交流できませんでした。そこで感じたのが自信のなさでした。よく考えてみると、三崎高校での活動を通して少しは人見知りが軽減されましたが、それでも人と深く関わることに対し抵抗があったのは、自分に自信がないからです。研修でも、誰かと簡単に交流すること自体はそこまで難しくなかったものの、自信がないことで、相手にどう思われるかわからないという不安が勝ってしまい、話せないことが多かった気がします。また、自分から行動できなかったことだけでなく、自信のなさが周りに伝わって、話しかける気にならなかったのかもしれないというのも、コミュニケーションが上手くできなかった理由だと思います。交流だけでなく、2日目の最後に行った各学校での発表の後には、引率の先生から発表中の姿勢や声のトーン等でも、自信のなさが目立っていたと指摘され、そこでもさらに自分の課題の大きさを感じました。

一方で、些細なことでも自分の成長を感じられた場面もあります。フィールドワークが終わった後、自分たちが三崎高校で行っている探究活動について話す時間や、フィールドワークで聞いたことを基に、班ごとにその地域の課題解決案を話し合い、発表する時間が設けられました。そこで、三崎高校での活動や、自分の意見を班員に積極的に発信することができました。また、発信するだけでなく、聞いているときに相槌をうったり、相手の話から色々なことに結び付けたりするなど、今まで自分が苦手だったことを克服することもできました。模造紙で発表用の資料を制作するときでも、「こういう構図がいいんじゃないか」と提案できたし、緊張して早口になることなく発表できました。その後に行ったバレーボールや会食でも、他校の研修メンバーと互いのことについて話すことができ、フィールドワークでの失敗を埋め合わせるような交流ができました。2日目には、飯野高校内を案内してもらった後、各学校で考えた案について他校の生徒と意見交換や発表をする時間もありました。このような活動の中で、初めに挙げたような課題はあったけれど、失敗してしまった分、そこから自分なりに考えて動いてみたことで、自分自身を成長させることができただけでなく、今でも連絡を取り合える仲間を作ることもできました。

私は、今まで他校の生徒などと交流をした経験がないまま、いきなり県外へ研修に行くこととなったので、楽しみでもあり不安でもありました。現地のものに触れたり、交流したりする中で、メンバーの2人や先生には何度も支えていただきました。特に先生には、長時間の運転に加えて、私たちが充実した研修が行えるよう、たくさん配慮して最後まで見守っていただき、とても感謝しています。

研修では、これから生かせることを学んだだけではなく、地域探究を通して自分自身の探究にもつなげられたので、自分の課題を見つけることができ、とても充実したものとなりました。今後進路を考えていく中で、自信のなさという課題は一番の敵でもあると思います。その敵に打ちのめされる前に、これからの学校生活では自分にできることを見つけ行動していく中で、自信をつけていきたいです。また、今後このような活動に参加できるチャンスがあれば、弱気にならず積極的にチャンスをつかみに行きたいと思います。



カ 引率教員による所感

○ 高岡 仁哉（地域協働課）

今回のサミットを通して、飯野高校を支える地域全体の前向きな姿勢や、探究活動を支援する土壌が培われていることが、三崎高校との共通点だと感じた。三崎も飯野も地域の大人たちが熱心に関わってくださり、今の大きな成果を挙げられているということを実感し、改めて感謝しながら、日頃の教育活動に当たっていかなければならないと感じた。2日間のフォーラムの中で特に印象に残っている言葉が、えびの市で地域おこしに尽力されている方の「子どもたちが次の世代になった時、この町を好きでいてくれるように」という言葉である。その町の経済や人口を活性化させるだけでなく、未来の地域を創る子どもたちの地域愛を醸成することが、持続可能な地域活性化につながるのだと気付くことができた。一番近くで生徒を見ている私たち教員が、彼らと地域とをつなぎ、地域愛を醸成することのできる架け橋でありたい。また生徒たちはフィールドワークを通して、知らない地域を歩き、触れ、見て、学ぶことで、自分の地域の新たな価値を見出すことができた。えびの市と各自の地元の共通点・相違点を知ること、異なる視点から地域活性化を考え、地元やえびの市の持つ課題の本質を捉えることができた。

サミット終了後、帰りの車中では、参加した3名の生徒が今回の成果や課題について熱心に語り合っており、非常に喜ばしく頼もしく感じた。えびの市に暮らす地域愛の深い大人たちとの交流や、全国から集まった情熱ある高校生との触れ合いを通して、生徒は新たな発想や活動を積極的に取り入れると同時に、自身の課題を乗り越えてよりよい自分になるために必要な経験を得ることができたようである。

